

関東大震災はいかに回想されたか (四)

——自伝に描かれた関東大震災——

柴 口 順 一

(帯広畜産大学人間科学研究部門)
二〇一九年四月二六日受付
二〇一九年七月 三日受理

How was the Great Kanto Earthquake recollected? (4):
The Great Kanto Earthquake described in an autobiography
Junichi SHIBAGUCHI

はじめに

前稿では、東京を除く関東地方の証言を見てきた。本稿では、いよいよ東京における記述を見ていくことにする。ただし、東京二十三区以外の市町村の記述は見当たらなかったため、二十三区内に限られる。震災当時、東京の区部は十五区で、その範囲も現在と比べかなり小さかった。したがって、かなりの部分が当時は区外のいわゆる郡部となる。区分や名称も現在とは相当異なっているが、本稿ではすべて現在の東京二十三区の区分、名称に改める。町名も同様である。町名もまた現在とは相当異なっていることはいままでもない。

現在の東京二十三区を大きく分ける仕方には、これと定まったものがない。そこで、便宜上、西部、中心部、東部の三つに分けて見ていく。ただし、中心部の五区にその証言が集中しているので、それらは区ごとに章を改めて記すこ

とにする。新宿区、文京区、千代田区、港区、中央区の五区である。これらの区は、新宿区のおおよそ西半分を除いて当時の区部に入っている地域である。本稿では西部と、中心部の新宿区を見ていく。
なお、前稿までの目次を記しておく。

(一)

1 海外——ヨーロッパ

ドイツ——ベルリン・ハイデルベルク
フランス——パリ

イギリス——ロンドン・オックスフォード

スイス——リュシユロン

2 海外——アメリカ

アメリカ——ニューヨーク・シカゴ・ポコノ
メキシコ——メキシコシティ

3 海外——アジア

ロシア——ウラジオストク・ユジノサハリンスク

韓国——釜山・ソウル

台湾——台北・基隆

中国——錦州・上海

シンガポール

4 海上

(一)

5 九州

熊本県——熊本市

大分県——大分市

福岡県——北九州市

鹿児島県——鹿児島市

6 中国・四国

山口県

広島県——広島市・呉市

岡山県——岡山市

愛媛県——宇和島市

7 近畿

兵庫県——神戸市

大阪府——大阪市・豊中市

京都府——京都市・宮津市

滋賀県——彦根市

奈良県——奈良市

和歌山県——新宮市

三重県——伊勢市

8 中部

愛知県——名古屋

静岡県——静岡市

長野県——軽井沢町・松本市

富山県——高岡市

9 東北・北海道

福島県——福島市・会津若松市

宮城県——仙台市

山形県——米沢市・鶴岡市

秋田県——秋田市

北海道——札幌市

(二)

10 関東

群馬県——高崎市・渋川市

栃木県——宇都宮市・那須烏山市

千葉県——市川市・千葉市・九十九里町・山武市・南房総市

埼玉県——さいたま市・川越市・所沢市

神奈川県——箱根町・小田原市・大磯町・鎌倉市・横須賀市・横浜市

11 東京——西部

大田区

薄田研二(注1)は大森北の自宅にいた。薄田はまだ役者になる前で、画家になる未練も捨て切れずにいた。『みやこ新聞』の学芸記者から、新たな劇団が浅草での旗揚げ公演を準備しているで行ってみてはどうか、という手紙が来てようやく決心がつき、「じゃあ行ってみようか、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらと

きました。」と記されているが、少々作意的な感は否めない。「家ははじめの一震でペチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。」とあるが、若い時から空手をやっており、その「呼吸でどうにか危地を脱すること」ができたという。家がつぶれ行く所がないので、妻のついで大阪の伊丹に家を見つけてもらい住むことになった。「汽車はまだ通じていないので軍艦に乗って清水港まで行き、清水から汽車に乗りました。」と記している。大杉栄と伊藤野枝、甥の宗一が憲兵大尉甘粕正彦によって虐殺された事件、川合義虎や平沢計七らが惨殺された「亀戸事件」についても言及されている。

柳永二郎（注②）は大森の自宅にいた。大森は東西南北に加え中と本町があるが、いずれかは判明しない。柳はすでに役者として活躍していた。稽古休みの日で家にいたが、「外へとび出すときに、まず台本を持って出た」とあるが、それ以上の具体的なことは記されていない。「大森は家も崩れなかったし、火事にもあわなかった。」と記されているだけである。東京は焼野原になって芝居どころではないので、大阪に帰ることにした。救出船のアンデス丸に乗ったが、遠州灘で暴風に遭い、伊勢の四日市の港に逃げ込んだという。「このとき、四日市の人たちにずいぶん親切にもらったのを忘れない。」と記している。焼け出された仲間が次々と大阪に集まって来たので、十一月から角座で芝居を開いた。十五日ずつ四つの芝居を年内いっぱい行なった。楽屋では「九月一日命はおしし」というシヤレが流行ったという。「フグは食いたし命は……」の語呂合わせであった。

品川区

藤本とし（注③）は北品川の自宅にいた。「ちようどお昼どきで、これから食べようつてとこでした。そりゃひどい揺れで、立ちあがるうにも立ちあがれないんですよ。立ったと思つたらボタンと膝をついてしまつて……。」と記している。続けて、「ほんとにあの震災のつらかったこと……。」といっているが、それは藤本がとりわけ癩病患者だったからである。四年前に発病し、外来患者として家から病院に通い、人目につかないようひっそりと暮らしていたのである。

いえ、つらいといっても恐かつたつてんじやないんです。家を出なきやいけないんですもの。それまでの二階でのしんぼうというのも、隠れているためのしんぼうでしょ、そのしんぼうだからできたんです。それがあの震災で、隠れてられなくなつて、どうしても他人さんの中に出ていかなくちやいけない。あたしはそれだから、食べものがなかるうが何がなかるうがかまやしない、あたしは出ないといつてがんばつたんですけどね、やがて巡查やら消防団やらが見まわりにきて、出なきやいけない出なきやいけないつて、やかましいんですよ。それでしかたなしに、おつかさんと一緒に出まして、あたし隅っこの方で——みんな集められて、一か所にかたまつて避難してたんですけれど——半纏をスツポリかぶりましてね、じいつとしてたんです。

だが、夜になると火の粉が飛んできて背中や頭のところから燃え出した。「それで、まだ暑い時なのに一生懸命かぶつて顔をかくしていたのが、そうはいかなくなるんです。それがほんとうにつろうごさんした。」と訴えている。一晩でこりこりした藤本は次の日の真夜中に一人家に帰った。「二階が上がつて、かしいだ押入れの中に手さぐり入り込んだんですけど、もう、その時は、どれだけほつとしたかわかりません。それからは、締め切つた押入れの中に入ったきり、飲まず食わず。暑かろうがひもじかろうが、とにかく他人さんに顔を見られなかったら極楽でした。」と記されていた。ちなみに、藤本は別のところで次のようにも述べていた。

私は今までに死を覚悟したことが三度ある。一は関東大震災で、火の粉の雨を濡れ蒲団でふせぎながら、ゆれる大地にしがみついていたとき。三は第一室戸台風で、大阪の外島保養院（光明園の前身）は壊滅、あつと言うまに全員濁流におし流されてしまったとき。二、このときだけは、みずから選んだみちであつたが、しかし、ともかく三回とも命拾いをしたのである。

鈴木文治（注④）は上大崎の自宅にいた。鈴木は日本労働総同盟の会長を務め

ていた。「九月と雖も残暑は烈しく、殊に蝸牛の巢のやうな小さな家であるから、暑さも一層強いので、家中で一番に風通しのよい玄關二畳の間に家族一同集まつて蓄音機などを鳴し乍ら昼の食事の出来るのを待つて居た」。家族は夫婦に五歳の長男と零歳の次男、女中一人で、それに七十余りの祖母が泊りがけで遊びに来ていた。「そこへあの大地震で、ドドドドツといふ何者とも名状し難い、恐ろしい物音がしたかと思ふと、瞬間にして壁は崩れ、瓦は落ち、皿、茶碗、小鉢類の棚の上より落ちる音凄じく、身内の血も一時に凍りつくかど許りの恐怖に襲はれたのである。」と記されている。鈴木はすぐに「地震だ！ みんな出ろ〜〜」と連呼しつつ立ち上がった。女中が五歳の長男の手を取り、妻は次男を抱き、自身は祖母を背負つて門の外に飛び出した。「附近は皆屋敷町で、石塀、煉瓦塀は見る／＼中に崩壊した。家根瓦は一瞬に落ち盡して、裸かとなった。電柱はその尖端に於て一二間かとも思ふ程揺れた。」とその時の辺りの様子を記している。家族はみな裸足で道路の砂利の上に立っていたので、危険を冒して家の中に引き返し、雨戸一枚と蓆、座布団と持ち出してきてそれに坐らせた。余震が激しく、「幾十回となく繰返して押寄せ来て、人皆生きた心地」がしなかつたという。しかし、二時頃になると空腹のために病氣でもしてはいけないと思ひ、家の中に入り縁側に腰かけて昼食を済ませた。家には幸い二斗の米があつたが、他の食料品は今のうちに買つておこうと思ひ風呂敷を持つて出かけた。うどん粉、大豆、小豆、罐詰類を手に入れることができたという。その夜電氣は来なかつた。「電燈のない暗黒の中で、幾十回とない地震に襲はるゝ不気味さは言語を以ては盡せない。」と記している。

二日の朝になると、火災が各所に起こつていた。「煙は朦々としてあちこちより立ち騰つて居る。時々奇怪な爆音が聞えて、不気味なること夥しい。」と記されている。鈴木は三田にある総同盟の事務所が心配になり、昼過ぎになつて様子を見に出かけた。事務所は煙突が一か所倒れ、屋根が傷ついているだけで無事であつた。そこへ会員五六名がやつて来て互いの無事を祝し合つた。四時近くになり、仲間と一緒に事務所を後にした。品川駅近くの北白川宮邸の前まで来ると、門の前に人だかりができていた。やがて門内から数十人の兵士が出て来て

整列した。そこへオートバイに乗つた伝令が来て隊長に伝えた。「本日午後横浜神奈川方面に蜂起したる約三百名より成る鮮人の暴徒一隊は、途中民家を劫掠しつゝ、只今六郷川の鉄橋にさしかゝりつゝあり、在郷軍人団並に青年団は之を迎へて交戦しつゝあるも、勢猛烈にして支ふること能はず、数時間後には東京市内にまで侵入し来るものゝ如し」ということであつた。その様子を見て「愈々事だなど思つた。」という。「三百名の暴徒」は可笑しいとも考へたが、併し現役の伝令兵の上官に向つて報告するところである。一点疑の余地はない。」と思ひ、家路を急いだ。大崎駅方面からは「進軍喇叭の音」、「次いで二三発の銃声」が聞えた。自宅近くまで来ると、続々と避難している人々に出会つた。わが家に着くと、家族は薄暗闇の中で食事をしようとしていた。食事どころではない、早く避難するよう促して、近くの小学校に避難した。そこにはすでに百名余りの人々が避難していたが、鈴木はそこで団長格に推される。「私はそこで婦人子供等は学校の二階の一室に送り込み、絶対静粛を命じた。男子隊には体操器具室を開いて、棍棒、手斧等を持たせた。手廻しのいゝ人は、白鉢巻に、日本刀を打ち込み、卵の殻に灰をつめた目つぶしまでも用意して来て居た。」と記している。しばらくたつて斥候に出た人々が帰つて来た。この斥候も鈴木が指示したものである。その報告によれば、「敵は目黒の馬場附近まで襲来したが、在郷軍人団、青年団の一隊に喰ひ止められ、猛烈な交戦中、麻布一聯隊より一個小隊の兵士トラックで駆つけこれ掃蕩中である。尚機関銃を携へた兵士が続々自動車で現場に集中してゐるから、大丈夫安心だ」とのことであつた。そこではじめてホツと一息をつき、わが家に戻つたのは夜の九時過ぎであつたという。鈴木は当時「鮮人の暴徒」を疑わなかつた様子であるが、最後に、「飛んでもない誤解から、彼の鮮人騒ぎの悲劇が演ぜられた。私はしみじみ、非常時に対する我社会組織には、多くの欠陥あることを感じたのである。」と記している。

「亀戸事件」や大杉栄らが殺害されたことについても記されているが、特に「亀戸事件」については殺された全員の名前があげられていることが注目される。「南葛労働組合の河合義虎、北島吉三、近藤広蔵、佐藤欣治、吉村光治、加藤高寿、山岸実司、鈴木直一及び純労働組合の平沢計七の諸君」と記している。川

合義虎と平沢計七以外はほとんど名前があがることのないので、あえて引いておく。ちなみに、この部分では「労働運動者の一群が、××の手によつて犠牲に供せられた」、「大杉栄氏の一族が同じく××の手によつて斃れた。」といったように、その被害主体が伏せ字になっている。鈴木自伝が上梓されたのは一九三一年であることに注意したい。昭和六年、満州事変勃発の年である。

三日には労働総同盟が緊急協議会を開催し、罹災救援委員会を設けたことが記されている。会長の鈴木は、十一日、内務大臣官舎内に設けられた臨時震災救護事務局に出頭し、内務大臣後藤新平に会見したという。その際のやり取りが詳しく記されているが割愛する。結果として、荷揚作業のための労働者雇用を確約させた。驚きなのは、鈴木自身もその労働に加わっていたことである。「私はこれから五日間といふものは、三百名の臨時人夫（重に会員）を引率して毎朝五時半に家を出で、六時半本部前集合、七時芝浦に出かけて懸命に働いた。米も擔いだ、テントも荷なつた。殊に辛かつたのは、米の荷揚の際、二十余の一団一列の人々の肩に四斗俵を地面から二人がかりで持ち上げて渡してやる作業であつた。」と記している。

小林恒子（注5）は豊町かあるいは二葉の自宅にいた。いずれかはつきりとは判断できない。小林はまず、震災の一年余り前の出来事に遡って記しはじめる。ただ、そのことが「この未曾有の天災に果たして関係があるのかどうか」と疑問を示しつつ、「なんとなく繋がりがあろうに思えて、忘れられない事なので書いておきたい。」と述べている。だが、あえて書くこととしたのには他に理由があつた。吉村昭の『関東大震災』（文藝春秋 一九七三）を読み、その中にそれと思われる記事を発見したからである。「やはり事実であつたことが証明された思いで、私は長い間抱えていた疑惑が氷解して嬉しかった。」とその時の気持ちに記されている。吉村の記述は、「……また翌年十一月四月二十六日には、東京湾にのぞむ地域にかなりの強震が見舞つた」というものであつた。小林は学校の二階に通じる階段の途中で遭つたといつて、「進むことも退くことも出来ないで、普段はよく男の子達が股が滑り降りる手摺にしがみ付いて、頭上に押し掛かってくるような踊場の壁を見上げていた。」とその時の様子が記されている。「その

時の怖かつた感覚が、九月一日の大地震の前触れであつたように、後から思われたい」というのであつた。「繋がりがあろうに思えていたことはもう一つあつた。夏休みも終わりに近い八月二十五日頃から、連夜続いた雷雨のことである。「これは自分が何より嫌いなものだけによく覚えてる。」と述べている。「雷は怖い、激しい雷雨程過ぎ去つた後は、からりとして涼しく爽やかになるのが普通であるのに、その時の雷雨は二、三日続けざまに毎夜少しも弱まらず鳴り轟いても、蒸し暑さは一向に去らなかつた。」と記されている。その異常天候が回復しないまま八月は終わり、九月一日になつたというのである。

九月一日の朝は、前夜来の暴風雨めいた天気であつた。生温かい南風が強く吹いて、時々叩き付けるように雨が降つて来た。その中を、蒸し暑いのに雨合羽を着て、洋傘がお猪口になりそうなのを気にしながら、袴の裾も靴下も足もぐしよ濡れで、第二学期の始業式に出かけて行つた。式が終わる、教室で蒲生先生の話を聞いた後、掃除を済ませて下校する頃は、まだ風は強かつたが雨は上がつていた。荒々しい雲間に眼に泌みるような紺青の空が覗き、真夏のような陽射しが時々かあつと照り付けた。

小林は第三高等女学校に通つていた。学校から家に帰つたのは十一時半頃であつたという。母親が用意した果物を食べ、英語の宿題に取りかかつた。「ペンを執つてから何行も書かない時だつた。アツ、地震！ と感じたのは……。」と記されている。続けて、「後は滅茶苦茶だつた。家全体が大波をかぶつた木の葉のように踊り狂い、私はその上を戸惑つてよろけ回つた。何か理由のわからない悲鳴を上げていたと思う。台所の方で瀬戸物の割れる音がしていた。茶の間の箆筒の上の姫鏡台が、硯箱や算盤と一塊りになつて雪崩落ちて来た。」と記している。その時、洗濯物を干しに外に出た母親が早く出て来るよう叫んでいるのが聞えた。小林は縁側から裸足で飛び下りた。「眼の前を大きな鳥の影が過つたかと思うと、飛び石に当つて砕け散つた。屋根瓦だつた。庭から台所前の路地へ出ると、雨上がりのぬかるみに足が滑つて、幾度も四ツん這いになり、その上

に両側の建物が今にも倒れそうに傾いて来た。」と記している。小林は命からがら隣家の広い庭に出た。そこに家族みんなが集まり、近くの人々も集まって来た。「最初の大揺れは一応おさまったが、地面は絶え間なく大きく小さく身震いするように揺れ動いていた。烈しい揺れが来る時には、丁度大きな雷が鳴る直前に鋭い稲光りがすると同じに、遠くの方から凄じい地鳴りがして来て、地面は上下に突き上げられ、突き落とされ、がくがくに振り回された。」と記されている。まだ太陽が高いうちであったが、時々「爆発するような轟音」がし、「黒っぽい灰色の煙とおぼしい物」が空に広がっていた。夕暮れとともに空は火の色を帯び、太陽が沈むとますます赤さを増した。夕方には精米店の前で炊き出しがあり、お握りと沢庵をもらったという。余震はひっきりなしにあった。その夜は庭にテントを張り、筵を敷いた上に毛布にくるまって寝た。

翌二日の朝、別の精米店で炊き出しがあり、お握りをもらった。だが、米は全部炊き出しのために供出され、個人には売ってもらえなかった。生憎米櫃がほとんど空であったので、食べ物には苦労したといっている。昼過ぎになって、「朝鮮人襲撃」の噂が伝わってきた。それは、「ダイナマイトや鉄砲を持った不逞鮮人の集団が、もう多摩川の辺まで来ている」、「家々の井戸に毒を投げ込んでいる」というものであった。「私は真実、地震より何倍も怖かった。こんな時に、何故こんな事が起きたのだろう。鮮人達の……と思ったが、その時正直に言って、私の心の中に、死を予感する程の恐怖があったが、これ亦何故か、相手を憤ったり恨んだりする気持ちは微塵もなかった。」とその時の気持ちを記している。「鮮人達の……」が何をいおうとしたのかは微妙だが、その時の気持ちを小林は次のように分析している。

私はその時、恐怖に慄く心の底で、暴動の事実を「仕方がない事」「無理のない事」かも知れないと、半ば肯定していたような気がする。日韓併合という歴史的事実があった以上、朝鮮人民は日本人であるのに、日常、私達子供の眼にも心の痛さを覚えずにはいられないような、冷酷残忍な仕打ちがいくらでもあった。土方はまだいい方かも知れない。汲み取った汚穢を瘦せこけた朝鮮

牛に引かせて行く姿、毛布の束を肩にかついで、戸毎に売り歩いている姿、飴売りの姿。一家が暮らしている薄ッぺらな板や廃物トタンの継ぎ接ぎの小屋、小学校の児童達の差別的な態度や意地悪、大人も子供も、彼等一般を、乞食のように見下している我れ我れ多くの日本人達……。そうした生々しい状況を、日常茶飯事の中に、平気で当然あたりまえのように、或いは見て見ない振りをして過あやましている（正しく私もそうだ）沈潜した罪の意識が、私の心に作用したのだ。

薄暗くなった頃、小学校の校庭に集まれとの命令があった。小林の一家ははじめ従わなかったが、自警団の人に促されしむ校庭へ行った。すぐに従わなかったのは、父親が「朝鮮人襲撃」の噂を疑っていたからでもあるが、母親が身重で病弱であったからでもある。何時頃であったか、「遠くからそれと判る地鳴りが響いて来て、又々大地が上下に踊り、大揺れに揺れ出した」。「父は母を庇い、私達姉弟は父の身体にしがみ付いているより外になかった。私はその時、異様な音を耳にしていた。それは私の耳に、巨獣の苦しい呻き声に聞こえた。骨組みだけの大きな校舎の軋む音と判っていても、命のある生物いきものの呻き声に聞こえたのだ」と記している。校庭に集まったもののその後は何の指示もなく、人々は次第に去っていったという。その夜は、父母は家に入って寝たが、小林ら姉弟は近所の人とテントで寝たといっている。

三日には時雨のような雨が降った。「三日目の夜半」と記しているが、三日の未明のことであろう。「度々来る余震もまだ怖かったが、それよりも、暗闇のテントの中で、空腹の上に、冷たい雨までびしょびしょと寂しい音を立てて降り出した心細さには、とうとう我慢が出来なくなって、夜半に私はそと弟たちを起こして家へ引き揚げた。」と記している。一週間程たった頃、関西方面からの救援物資が届いたという知らせを受け、母の代わりに小学校の校庭へ行き玄米をもらってきた。「貰って来た玄米は、人に教えられた通り一升瓶の空瓶に少しずつ分けて入れて、細い棒で搗いて糠を取ろうと試みたが、容易に白くなるものではなかった。」と記されている。ちょうど同じ頃、京橋に住んでいた従姉がひっそり現れた。東京が火の海と聞いた時から心配し、無事を祈っていた人物であった。

その従姉が語った話が記されている。そのものいいからもわかるように、従姉は「底抜けみたくに明るい表情」で話したという。

……火事の時、腰巻を出入口や窓に張ると、火を防ぐつて前から聞いてたから、持ってた新しいお腰を気前よく張って逃げたけれど、綺麗さっぱり丸焼けさ。焼け跡へ行つて見たら、鉄瓶と空になった手提金庫の焦げたのが転がっていただけ。一緒に逃げたのに、お父ツつあんだけがはぐれちゃって、おッ母さんと夫と私の三人は宮城前へ行ったのよ。物凄い人と荷物だったわ。私なんかその気になりや、いくらでも持ち出せたのに、あの夫が性急だから、あわてておッ母さんを買ってもらった着物と帯だけ後生大事に負って逃げたの。もつとすぐ役に立つ物にすればよかったのに、やつぱりそれだけ気を使ってるんですよね。

はっきりした記憶はないが、学校は九月いっぱい休校ではなかったかといっている。少なくとも勉強はしばらくしなかったという。校舎の被害はそれほどでもなかったが、他校とのつり合いからか勉強には取りかからず、「罹災者に贈る為の衣服縫いをした。」と述べている。授業がはじまると早速、地理の先生が黒板に関東地方の地図を広げて地震の話をしてくれた。また、図画の先生からは、大震災に遭って避難する時の姿を絵に描けと命じられたという。今であつたら問題になりかねないであろう。だが、小林は画用紙の余白に、「風呂敷包みの内容を列記し、避難する時の注意事項、例えば火の粉を防ぐために、頭に被る手拭を濡らすとか、飲み水の用意をするとか」色々と考えて書いた。図画の課題は、震災に対する心得を促すという側面があつたのかもしれない。二学期はどうとう定期試験もなく、通信簿には「各学科の甲乙を書く代わりに「関東大震災のため評語を付せず」と、一様に私達に書かせた。」と記している。いちいち同じ文句を記すのは面倒と考え、生徒に書かせたということなのであろう。

これまたはっきりとはしないが、「既に十一月近かつたのではなかるうか」と記しているから、十月も終わり頃であろう。一家で上野の山に焼け野原の東京を

見に行ったといっている。上野ではバラックが公園を埋め尽くしていた。「大方は、継ぎ接ぎの焼けトタンや古菰で囲われている小屋で、乞食小屋としか言い様がなかった。欠けたコンロや歪んだバケツなどが、小屋の外に出しっぱなしになっていて、みじめな服装の罹災者達が其処此処で、昼食の仕度らしい煮炊きをしていて。」と記している。また、「人の密集している銅像の辺りは又、バラックやテント張りや露店やらの食べ物屋が一ぱいだった。そしてそれ等を食べるためにの群衆が犇めいていた。」とも記されていた。十二月になると、「ようやく盛り上がつて来た復興気分が景気付いて」きた。「復興節の流行を始め、あらゆる物や事柄に「復興」を付けるのが流行った。」と記されている。

明けて大正十三年一月十五日の夜明け、「九月以来初めての地鳴りを伴った凄しい余震が来た」。その日は冬休みの宿題を提出する日で、出来上がったのは明け方のことであつた。「ほつとして一と眠りしようと床に就いたばかりだった。私が飛び起きて、母の寝室へ行った時には、母はもう洋机の下に背を丸くして蹲っていた。」と記している。母親が四日前に出産したばかりで、それを気づかつたのである。「私の地震の記憶も、この翌年の一月十五日未明の地震で終わりを告げている。」と記されているが、最後にもう一つ付け加えられている。それは四日前の一月十一日に生まれた弟についてである。弟は病弱で、その後肋膜炎、腹膜炎、小児結核に悩まされたというが、それに関して次のように記していた。「大正十二年の大震災後母体内で震災に遇つて生まれて来た子供を、殊に身体の弱い子供達のことを、世間では何かにつけて、「震災ツ子」と言つて、それはずいぶん長い間、忘れた頃にひよいと飛び出しても生きている言葉であつた」。

世田谷区

中村白葉(注6)の自宅は新町にあつた。中村はロシア文学の研究者で、すでに『罪と罰』や『アンナ・カレーニナ』などを翻訳していた。地震発生時に自宅にいたとはっきりとは記されていないが、「この震災で、建てて一年足らずのわが家は、壁に亀裂がはいり、屋根がわらが全部ずり落ち、見るも無残なありさまで、ああまた借金の上塗りかと嘆ぜざるをえなかつた。」と記している。その後長らく「ろ

うそく一本で夜を送った」が、ひと月近くたった頃、「やつと電気が来て、世の中がぱつと明るく」なったという。以上のごく簡単な記述で終わっている。

高群逸枝(注7)は世田谷のある豪農の家に夫とともに寄宿していた。高群は作家の道を歩みはじめたばかりであった。ちょうど昼のご飯を食べていると、「急にめりめりと音がしはじめた」。「そら地震だ!」という声があちこちの部屋で起こった。「いつもの地震だとたかをくくっていたが、そうでなく、おどろくべき強震で、逃げ出すのさえあぶないほどの揺れかたであった。」と記している。高群は夫とともに竹藪に逃げ込み、しばらくの間はただぼんやりとしていたという。「家の屋根は揺れに揺れて、まるでいまにも落っこちそう。私たちはけんめいに両手で竹をつかみ、息をつめる。そして一時間余、たえず強く弱く揺れ返す地震の波の上に乗っていた。」と記されている。だが、その後は家の中に戻ったのである。突如、「座敷の東の縁側に出てみると」という記述があり、続けて「あたりはまるで真っ赤。空には雲が火のようになってはしやぎかえっている。」と記されている。「なんといつて形容したらいいか。すばらしいみごとな火事である。遠く東京市の涯へまでも行っているかと思われる火量。奥深い光。」とやや叙情的な、しかし少々突飛な言葉を書きつけている。朝から東京へ野菜を持って行った男衆が夕方に帰って来た時の話によれば、「新宿から神田、浅草の方面は一面火の海だということであった」。その後も東京の状況が頻々と伝わって来た。「浅草十二階は二つになって落っこちた。砲兵工廠もあぶなくなっている。神田神保町は全滅だ。芝も焼けた。電車は燃え飛び、火薬庫は爆発し、水道は破裂し、消防のつくしようもない……。」といったものであった。

翌二日の朝になると、また次々と情報が入って来た。「麹町三丁目までいま燃えひろがった。銀座も全焼、京橋も、東京駅も、三越も焼けてしまった、などと。——火は浜離宮に向かおうとしている。本所も、深川も、火の海だ。日比谷には死人が山のように積んである。新聞社も焼け失せたらう……。」といったものであった。翌日になって家の被害状況がはつきりしたのであるうか、「湯殿の柱がゆがみ、煙突が割れ、煉瓦が崩れ、味噌部屋が傾いて味噌がめがころがり、門の土塀がこわれた。しかし母屋では壁がいたみ、簞笥がひっくりかえったぐらいで、

大した被害はなかった。」と記されている。夕方になって、警察が回ってきた。「横浜を焼け出された数々の朝鮮人が暴徒化し、こちらへも約二百名のものが襲来しつつある」ということであった。加えて、「避難民はぞくぞく、「一夜の宿」を乞いにくる。その乞いにくるものにはたいしてはかならず許諾せよという布告が三軒茶屋あたりには出されているとのこと。ここらにも明日あたりに出されるだろう」という話であった。その日は妙に蒸暑く、余震もひっきりなしにやってきた。三日。情報はやはりひっきりなしに届く。「もうその辻、この角で、不逞朝鮮人、不逞日本人が発見され、突き殺されている」、「朝鮮人は爆弾を二つあて持っていて、市内ではあらゆるところで兵隊と衝突し合っている」、「監獄が破られて数百数千の囚人が解放された」といったものであったが、「不逞日本人」といういい方は注目すべきであろう。なお、以上見てきた震災に関する記述は、古ノートに記した「九月一、二、三日の震災日記」から拾ったものだと述べているが、それ自体が当時書かれたものとは少々考え難いことを付け加えておきたい。

斉藤長次郎(注8)は三軒茶屋にある砲兵連隊の酒保にいた。「パンを食べようと思つて、それを一口、頬ばつた瞬間、グラグラッと来た。柱にかじりついたが、あつという間に、その柱が四十五度も傾いたのにはびっくりした。」と記している。続けて、「窓から営庭の向こうを見たら、並んでいる兵営の右の棟と左の棟が、揺れて軒をぶつけ合っているのだから、これはたいへんなことになったぞ、と思つた。」と記されている。すぐさま、非常呼集のラッパが鳴った。「全員、厩へ行けつ、馬を逃がせつ」というのが最初の命令であった。厩の倒壊による馬の圧死を避けるためであろう。その後、皇居に向かって出発し、近衛砲兵連隊の午砲警備の任務にあたった。「これは通称「ドン」といつて、明治四年から、正午になると空砲をドーンと撃つて、正午であることを市民に知らせた、その大砲だ。」と説明を加えている。「この警備のため、世田谷から駆け足で、今の千代田区、あの皇居まで行って、また帰って来たのだから、当時の兵隊は頑強なものだった。」という感想も記されている。帰って来ると、営庭に大きな穴を掘つてそれをかまどにして炊き出しをした。そのうちに、「朝鮮人が暴動を起こしたという流言蜚語が伝わり始めた」。今、暴徒が井戸に毒を投げ込みながら、この聯隊目ざし

て進撃しつつある。その先鋒は、すでに三軒茶屋に突入した」などという情報が届く。その流言を真に受けての威嚇を意図したものであろう。連隊では、「野砲を引き出し、営門のところに一門、そのほか三門を配置して、これに空砲を装填し、いつせいに発射した」という。だが、その音に驚いたのは付近の住民であった。「四門の野砲の一斉射撃は、市民たちを腹の底から揺すりあげ、恐慌状態にしまった。」と記している。「戒厳令が布かれ、兵隊である私たちは不眠不休で、九月初旬の炎天下をどれほど駆け回ったことだろう。「汗びっしりよりで、肌から塩が取れるほど」だったが、「幾日も風呂に入れない。そんな暇は、全くなかったからだ。」と回想している。

きだみのる（注9）は下馬の自宅にいたが、地震発生時のことについては何ら記されていない。翌日、音羽と築地にある友人宅二軒を回った。前者は無事だったが、後者は焼失していた。続けて、「宮城前には難民がわずかばかりの荷物を持って呆然としていた。ところどころに「大阪から連合艦隊が米百万トンを積んで品川に向け出発した」という貼紙があった。ところどころの木には亀戸細胞の署名入りで「富豪の大邸宅を占拠せよ」というビラが貼り出されていた。」と記されている。「細胞」とは共産党の下部組織をいう。きだはそれから渋谷まで歩いて行った模様である。渋谷に着いた時は日が暮れていた。「道玄坂を上って何分か歩いたところに輜重隊本部があった。そこから先は通行止めになり、歩行者は本部の構内に収容された。」という。「神奈川ざかいで鮮人の掠奪隊が放火暴行しながら東京に向かっていくから」というのが理由であった。だが、一時間ばかりしてから解放され家路についたという。平沢計七らが殺害された事、大杉栄と野枝が扼殺された事にも触れ、大杉栄の死体を受取りに行った宮島資夫の発言が記されている。宮嶋は、「門を出るとき衛兵が『扼殺じゃないよ。帰ったら調べて見なさい』と言ったんで、自宅に運んでから調べてみたが、全身包帯でぐるぐる巻きになっていて、剣で刺されたのか扼殺なのかわからなかったよ」といつていたという。なお、きだの自伝は、「おまい」を主語とする二人称で記された珍しい形式を取っている。

菅原道明（注10）は三宿の自宅にいた。菅原は福島電灯を退職し、自宅で療養

中であつた。「工場の汽笛を聞き最早正午だ」と思い、茶の間へ行った。少々風邪気味で熱があつたので、体温計を腕下に挿んだ。「其時俄然異様の響が、どこからとなく起り、ズドンと上下に震動、続いてユラ／＼と前後に震動した。「スワ地震だと飛び立ち、急速書斎に突入、障子を開けようとする一刹那、震動はげしく、立つて居られない。柱にすがつて僅かに身を保つてゐたが、椽先の硝子戸は悉く外方にはづれて倒れた、障子の半数も同じくはづれた。」という。障子の隙間から庭に飛び下り妻を呼んだが、「妻は最早足を運ぶ事も叶はず、予て云ひ聞かせ置いた、室内で最も大丈夫安全なりと指定し置きたる神棚の傍の柱につかまり、庭に下りることを得」なかつたが、「暫らくして震動聊か寛んだ時、始めて庭に出ることを得た。」と記している。菅原は体温計を挿んだまま向かいにある神社の境内に入り、我が家の様子を見ていた。「続いて起る第二の大震動、家屋は南北に、波にゆらるゝ船の如く、劇しく動揺し、家根瓦はズル／＼と、徐々に、波のうねりに似て、椽先きに垂れ下がる、其瞬間の光景、今にも倒壊せんかと思ふ、それは実に一二秒の刹那の出来事であつた。」とその時の様子を記している。幸い家は倒壊を免れたので、妻は一度家に入り、炭火を消して逃げるように戻つて来た。余震は絶えず続いていたという。二時間くらいたった頃、菅原は妻とともに家の様子を見に行った。「先づ神棚の神位は神酒罎、花立の類とも悉く落下し、台所の置戸棚、又茶の間の戸棚は悉く北に向つて倒れ臥し、在中の陶器類は微塵に破壊し、糠味噌樽迄顛倒し居る姿、酒醬油等の液類は流れ、壁は全部満足の箇所なく、亀裂を生じ、或は悉く打ち倒れ居るなど、目もあてられぬ有様だ。」と詳細に記している。家屋の外観についてもまた、「庭園の南方より家屋の下を通し、地表に亀裂を生じ、口を開くこと五分乃至一寸。又家の東南は凡そ二三寸陥落し井戸側の土管も亦破壊してゐる。従て家屋の半分は東北に傾き、戸障子は其儘開閉出来ない。家根瓦は檐に迄落ち下りて、上部は禿げ棟となつて居る。併し地上に落下せし瓦は数枚に過ぎなかつた。」と詳細に記している。家は前年に建てたばかりであつた。

時間の経過とともに各地の被害状況がわかってきた。「曰く今は赤坂見附焼け、猛火天に押し、其凄きありさま言語に絶する。曰く今は九段下一面の火。曰く須

田町より神田、日本橋と延焼、曰く今は本所、深川、……」と様々な情報が伝わって来る。「皆の話の結着は東京市全滅と云ふに終る。夫れは悉く地震を云ふに非ず、地震の爲めに起りし、火災の惨害を云ふのだが、今や皆々の頭には地震なく、唯火事あるのみである。」と総括している。

軍隊は繰出され、馬蹄の響砲車の音、警官は安寧秩序を保たんと欲するも其甲斐なく、火事に追はれて郡部に逃げ来るもの、親族縁者の見舞に走る者、火事見物として馳せ居る若者、泣き居る者、狂ふ者、電車は悉く止まり、線路のそこ此処に立往生して居る。市街地にして安全地帯無き所の人々は、老若男女を問はず、線路に充満するほど群り、病者もレールを枕にして苦悩し、妊婦は俄に産氣を催して子を生む。産婆を迎へんとすれど、最早居所不明にて、医師を頼まんと欲すれども、逃れて居らず。居りしとて聘に応ずる者も無い

これが「近境」の状況だといっているが、やや類型化された表現であることは否めない。菅原は子供や孫が住んでいる渋谷の家が気になったが、いかんともし難かった。だが、隣家の息子が見かねて、自転車で一走りして見てきてあげようといってくれた。氣をもみつ待つていたが程なく戻つて来たという。三宿から渋谷まではそれほど遠い距離ではないが、混乱時に首尾よく往復できたことは幸運といえるであろう。隣家の息子は、「何等被害なく、唯家根が少しく破損したばかりで皆様には無事——宅の下女も——其時間が少し早かつたので、学校通ひの孫さんたちも皆な無事で、あちらでは却てみなさんが三宿の祖父母はツブサレたのでは無いかと、心配中であつた」と報告してくれた。四時近くになつた頃である。「不図天を仰げば、どうしたことだらう。南東の空に、何とも形容も出来ない、誠に美麗なる奇雲簇々として半天を覆ひ極めて緩なる速度にて、東北の方位に移りつゝある」のが見えた。その美しさを縷々説明したあと、「人々は之を入道雲と云つて居たが、又此雲は雲に非ず、多数の人と物とを焼きし煙が、今天上しつゝあるのだとも云ふ、我れ之を知らず、然れども、大火の煙に日光の反射したるものなることは、想像し得た。」と述べている。続けて、「此雲煙次第々々

東北に移り、南は品川の上と覺しき所より、北は新宿の上と覺しき空に及び、漸時南方薄く北方濃に、日の暮るゝに従ひ、消散したが、或は日光の反射止りたる故か、いつとなく薄らいで、終に見えなくなつた」と記している。この頃から余震はやや緩やかになつたが、その間を縫つて幾度となく爆発音が聞こえてきたという。「火薬庫の爆裂か或は石油貯蔵の破裂であつたらう」と推測している。

翌二日、混乱は一層激しく、余震にも時々襲われた。菅原は食料の調達に出かけた。出入りの米屋へ行くと白米はないというので、餅米三升と玄米一斗を届けてもらふことができたというから、これまた幸運であつたといえる。昨日と同時刻にまた大地震が起るといふ噂が立ち、人々は不安に襲われた。「故に本日は皆々竹藪の中に、戸板、薄縁の類を持越し、其上に寢床を伸べ、又は蚊帳を吊り、如何なる地震ありとも安心と、心を落付け茶を喫し又は寝転び居る。」という状態で時を過ごした。菅原は知己友人らに無事を知らせようと思ひ立ち、葉書二十四枚を認め世田谷郵便局に出した。だが、そのほとんどは配達されなかつたことが一ヶ月後に判明したという。「郵便物然り、汽車も通ぜず、電車は停電、電燈は点ぜず、機関は動かず、水道の水は全く出でず、食料は欠乏し、殆んど百年前の饑饉に遭遇しつゝある状態」であつたと記している。いわゆる「鮮人騒ぎ」についても詳細に記されている。

鮮人三千、玉川の沿岸に集合し、暴動を起さうとしてゐる。之れは横浜地方より入込みし者、又甲信地方より到りしものは今武蔵野の原の某地に集まる、其数百千あり、直に新宿を衝くべしとの風説を伝へ、巢鴨、日暮里方面、本所、深川方面又は品川方面まで入込み居る、其の数凡そ三万（内地在住鮮人の凡そ半数）それが皆爆弾を携へ居る。世田ヶ谷の地は、三宿に重砲兵旅団あり、野戦砲旅団あり、又た東北の高地には騎兵大隊あり、附近上目黒には輜重兵大隊あり、三軒茶屋の南方には何隊あり、是れ等兵団の多き地を撰み衝突し、一挙にして東京市に入らうとしてみると、見て来た様な流言飛語、私はもとより之を信じない。

だが、そのうちに自警団と称する連中が来て、みな戸締りをして各々練兵場に避難せよと触れ回った。兵営にはすでに了解を取っており、すぐに入ることが出来るとのこと。信じていなかったといっていた菅原だが、「サー一大事と、事の真偽、勝敗の議論等を、為し居る場合に非ず、傍杖喰はぬが専一」と、妻とともに練兵場に行った。日も暮れ、辺りも暗くなってきた頃であった。営内の様子は、「己に先きに入りし人々雲霞の如く、立つ者、踞する者、蓆を敷きて坐する者も居る。新しき毛布をぬかるみの上に敷き、老幼を護り居る者も居る、凡そ二三千人。然るに提灯の火一つなし、煙草の火も見えない。」と記されている。なぜ火も焚かず明かりもつけないのかと聞くと、「鮮人が其火を見て押寄するからだ」ということであった。「夏の虫でもあるまい……」と、少々ユーモラスな感想が付されている。しばらくはそこで過ごしたが、やがて「偵察の結果、鮮人暴動の恐れなし、其上軍隊にては己に十二分の準備手配を盡したる故、最早安心して可なり、来衆悉く帰宅してよい」とのお達しがあり、帰路についた。時間は午後十時を過ぎていた。だが、その夜は自警団が警戒怠らず各戸を巡回するなど騒々しく、寝についたのは夜半になってであった。

三日、菅原は渋谷へ様子を見に行った。途中、警察署の掲示場や電柱にビラが貼り付けられていた。その内容は、「震源は伊豆大嶋の東方約四五里の海中なりしが如し、故に其近地なる鎌倉、江ノ嶋、片瀬等は非常の被害にて、江ノ島は海中に陥没したり」とか、「横浜市は東京市以上の被害を蒙り、藤沢、函根等も共に甚し」といったものであった。その日も火災はおさまらなかったが、四日になってようやく鎮火した。「聞くに市内で全く火災に罹らざる区は一もなく、全滅は日本橋、京橋、神田、浅草、本所、深川の六区、大半の焼失は麴町、芝、下谷、赤坂、本郷、小石川、四谷の七区、小災は麻布、牛込の二区のみ」と記している。四日には甥が訪ねて来た。兵士であった甥は、命令により昼夜兼行で宇都宮を往還し今帰ったところだという。次の記述は甥による話である。

通信機関はなし、無線電信あるも、受信の装置無き所には通ぜず、故に今日に在りては、近きは自動車、遠きは飛行機の外なし、又陸軍にては、伝書鳩を

も使用せしと聞く。東都の防備は無論のこと、死屍の始末、傷者の保護、危険物の取除き、糧食の収集、給与等、人手何程ありても足りない。故に各師団より、相当の兵を召集するらしい。鮮人の話も出たが、是れも全く迹形無き説とも思はれず、針小棒大の風声鶴唳にして、却て之が為めに奇禍に罹つた人も少くない、鮮人の厄難に遭へる者も多かりし

五日になってはじめて、『報知新聞』の夕刊の配達があった。この日も数十回の余震があったと記している。六日には電気がきた。だが、「一戸十燭一燈」の制限があった。郵便も葉書一枚のほかは来なかった。震災翌日に投函した二十四枚の葉書の一部が届いていたようで、見舞いの葉書であった。七日には福島知人の使者が、八日には甲府知人が、十日にはやはり福島知人が見舞いに訪れた。十一日以降は見舞状があちこちから来るようになった。十二日には四谷知人を見舞いに行こうと家を出たが、電車が鈴なりの乗客で乗ることができず家に引き返した。菅原がいわゆる外出できたのは二十日になってであった。早朝、妻と二人で三井銀行の丸の内支店に行ったという。その際に見た状況が次のように記されている。

其火事の猛烈なりし事、実に聞く所に勝り、人間の考へにては想像も及ばざる程であった。鉄骨鉄筋の煉瓦造り、又はコンクリート造りの、壁幅三尺もあるものが、容易に粉碎し、鉄骨は飴の如く曲り、鉄筋が蛛網の如く乱れ、垂れ下り居るなど、誠に想像の外と云はねばならぬ。又石造の橋欄は百間も建築物に離れ居るに、皆其炎を被りて破碎し居り、道路に敷きたる煉瓦も亦焼け盡し、アスファルト道路は皆湯の如く湧いて、道路面に流被し、知らないで踏んだ者は、熱鉄爐中に入るが如く、如何なる物品と雖も、殆ど焼燼さなないものはないと云ふ（中には高閣屹として峙へ居るを見るも是は外観のみで内部は悉く焼燼して居る。日本銀行、三井銀行本店等も亦此類）最早廿日も過ぎてみたので、流石人の死体は見なかったが、死者を多く出した家外には、道路の一面、ネバくする異臭を放つ油——中には油樽の破裂もあらうが——が浮び居るを踏み

中野区

中村汀女（注12）は中央の自宅にいた。句作をはじめていた中村は、句会から帰って来たばかりであった。暑い日で、帰り道に氷水を飲んだという。家に着くと夫から食事の催促があり、食べていたところに地震が起こったようだが、地震発生時のことについては具体的には記されていない。「食べかけた昼の茶碗を置いて裏から外に出」、「大家さんの家の方へ向かった」。そして、「そこにあった柿の木の下枝にしがみついた」といった記述があるだけである。

熊谷守一（注13）は東中野の自宅にいた。画家の熊谷は、二科展創設から毎年作品を出品していた。地震発生時のことについては詳しく記されてはおらず、「庭に出て見ていると、前の家の瓦は、三尺も飛び上がって、それから落ちていました。」とあるだけである。ただ、「ふつうの木造の家は、地震で倒れるときは横倒しでなく、その場にぺしゃんとつぶれてしまうものです。だから外に出ると、家の倒れるのはこわくはないが、気をつけなくてはいけないのは瓦です。瓦はいったん高く飛び上がってから威勢よく落ちてくる。これがこわいのです。」と記している。妻はなるべくたくさん水を汲んでおくようにと行って食料の買い出しに出かけた。身欠きニシンとソバ粉を買えてのちに役に立ったという。余震は丸三日間も続き、その間は外で過ごしたと記されている。ちなみに、熊谷は一八九四（明治二十四）年の濃尾地震のことにも触れている。「ガーツという不気味な音が、ある方向から聞こえてきたかと思うと激しい揺れがきました。どうしたのかわからずにポカンとしていたら、男衆がすごい勢いで私の背中を押し、私はころがるように座敷から外に出ました。」と、こちらは地震発生時のことを詳しく記していた。

岩野喜久代（注14）は東中野にある桃園小学校にいた。岩野はそこで教師をしていた。「児童たちを帰して、明日からの授業の下調べを終わり、帰り支度をしていると、いきなり坐っている椅子が、ズシンと上に持ち上がった。そしてドオンと下がった。急激な上下動が一、二分でやんだので、たいした事はないなと落ち付いていると、忽ち劇しい水平の揺れが続いた。その切れ方は柱が目の前に倒れて来るような角度で、暴風雨の中を船のローリングに似て、間隔はもつと急激

であった。」と記している。ちなみに、「明日からの授業の下調べ」といっているが、地震が起こったのは土曜日であったから勘違いであろう。続けて、「慌てて机の下に這い込んだ同僚もいたが、それは敏捷な人で、私には立ち上がることも、歩くことも出来なかった。横に長い校舎はギシギシと音をたてて、崩壊せんばかりに傾いたり、また元に戻ったりしている。その物凄いゆれは、何分つづいたのであるのか。もはや夢中で自分は押し潰されて死ぬだろうと観念していた。」と記されている。揺れがおさまると同僚たちと校庭に避難した。すると、南の空には入道雲のようなものが見えたという。「私はつきり、伊豆の大島の三原山が大噴火を起こしたか、大爆発をしてその噴煙だと思った。」と記している。それが東京下町の大火災の煙であったことはのちに知るが、岩野は「私が眼にしたのは、黒煙ではなく、九月一日の陽光に照らされて白く輝く大入道雲の様相だった。」とその時の印象を記している。

余震はひっきりなしに続いていたが、歩いて大久保の自宅まで帰った。家は無事であったが、途中で「近所の二階家の階下が潰れて、二階がそっくりその上に事なき如く完全な姿で載っているのを目撃した」。そのことから、「地震のとき、階上の人はそのまま逃げずに、落ち付いている方が無難である」という教訓を述べている。「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだ」という流言が伝わってきたのは九月三日だったという。町会で自警団を組織し、各戸から一人ずつ夜も見張りに駆り出された。アメリカからの救援物資が無償配給されたことにも触れ、被害の少なかった自分たちは「焼けた下町の人たちに相済まない心地がしきりにしたものだ。」と記している。東京を去る人が日を追うごとに増え、「東京はゴーストタウンになるのかと思った位だ。」という記述もある。だが、一年もたないうちにおびただしい人口増となったとも記されていた。

渋谷区

神近市子（注15）は広尾の自宅にいた。神近は新聞記者を辞めたあと、文筆で生計を立てていた。「私はいつものように二階で机に向かっていたが、階段をこるげるように降りると、表の道路に出た。私は泣き叫んでいる前の家の子どもを

連れて、近くの桜並木の下へ走った。」と記されている。「前の家の子ども」を連れ行ったのは、母親が留守であったからである。続けて、「桜の根元に持ち出してきた藁わらを敷き、子どもを坐らせると、ホッと安全感を得た。余震はつづいたが、ここなら危険はないと考えられた」と記している。夕方近くになり震動も弱くなったので家に帰った。夫も無事に帰って来た。翌日の二時頃、上野近くからやって来た青年が「朝鮮人騒ぎ」を教えてくれた。「いや、町はたいへんですよ。僕も朝鮮人に間違えられて、集団に天幕の中へ連れこまれた」とその青年はいった。「彼の顔は長めで色は白いほうだった。それで北鮮系と見られたのだろう。」と神近は推測している。続けて、「それにしても自警団の暴力行為はすさまじいものがあったらしい。生まれた番地や小学校の名をいわせ、よどみなく答えられないと『鮮人』のレッテルを貼って、竹槍で突き殺すそうだ。」と記している。大杉栄と「野枝、甥の宗一が甘粕大尉に虐殺されたことにも触れている。」

牧野富太郎（注16）は円山町の自宅にいた。牧野は東京帝国大学の講師であった。「此日は暑かったので猿股一つの裸になって植物の標品を覽ていた」という。はじめは坐って揺れ具合を見ていたが、そのうちに「隣家の石垣が崩れ出したのを見て家が潰れては大変と庭に出て、庭の木につかまっていた。」と記している。幸い家は多少の瓦が落ちた程度であった。具体的な記述はほぼ以上にすぎないが、牧野は地震に対して奇妙なことを書き記している。夜はみな庭に藁を敷いて夜を明かしたが、「私だけは家の中に居て揺れるのを楽しんでた。」というのである。さらには、「後に振幅が四寸もあつたと聴き、庭の木につかまっていたその具合を見損ったことを残念に思っている。」と述べ、「もう一度生きて居る中にある。いゝ地震に遇えないものかと思っている。」とさえ述べているのである。また、「是れは甚だ物騒な話ではあるが」と断りつつも、「私はもう一度彼の大正十二年九月一日にあつたような此前の大地震に出逢つて見たいと祈っている。」と述べていた。被害が小さかったからこそいえることだといえはそれまでなのだが、特異な感想であることには違いない。

藤田佳世（注17）は神泉町の通りを歩いてきた。「その年の夏はいつもの年にくらべてひどく暑さがきびしかった。長い夏休みも終えて、今日から学校という日

であつたが、その日もまた暑かった。その前の晩にかなりの雨が降り、木々のみどりも美しく洗われて、普通ならさわやかな風を呼ぶ秋の朝なのに、まだ降り足りぬような雲のうごきは、青い空のところどころを目隠しして、微風さえ殺していた。」とその日の天候を記している。藤田は小学校の五年生で、二学期の始業式が済んで十時半頃に道玄坂の家に帰って来た。友達と一緒に先生の家に行く約束をしたというので、弟を連れて家を出た。弟を連れて行くということで母親の許しが出たのである。弟、友達の三人で神泉町の通りを歩いて来た時であった。「両側の家の戸が、がたがたと鳴った」。最初は風だと思つたが、友達と顔を見合わせたたん、「足元の大地がぐらぐらとゆれ出した」。続けて、「ごーっ」という凄まじい地鳴りを聞いたようにも思うが、それは私の錯覚であつたかも知れない。だが、立っていられないほどの、地面がゆれていたことは確かであつた。」と記している。藤田は弟と友達の手を握り駆け出した。「あぶないッ、坐れ、すわれッ」と誰かがうしろで叫んでいたが、夢中で駆け出したという。神泉の通りを抜け大阪上の用水堀の端に出ると、「用水の水が両岸に叩かれて、ピシャッ、ピシャッと、四、五尺もはね上が」つている。もうこれ以上走つたら危ないと思ひ、弟と友達の肩を抱いてそこにしゃがみ込んだ。「いや、走ろうとしても恐らく走れなかつたであらう。」と加られている。続けて、「人も景色も大きなコマの上のせられていようであつた。ゆれている。何もかも大きくゆれている。みどりの木立ちに点在する坂下の家々が、一つの絵になつてそのままゆれている。私はただそれを眺めていた。」と記されている。ようやく揺れがおさまった頃、藤田は友達と別れ、弟を背負い何とか家まで辿りつくことができた。母親と一緒に近所の人たちが避難する裏の空き地に行った時、「前よりもっと大きい第二震が襲つて来た」という。

あまりのゆれ方に立っていられなくて、かたわらの梅の木に縋りついたが、その梅の木ごと、体が前後に一尺もゆれた。家々の廂が地につきそうであつたといつても決して過言ではない。倒潰する家の凄まじい土煙りを火事と早合点して、

「兄あにさんッ、大変だッ」と、当時、私の家に同居していた父の弟岩吉叔父が、

するどく叫んだのもこの時である。天も地もこのまま潰え去って、この世の終りというものが来たのではないかと、子供心にも魂が消えてゆくほど恐ろしかった。誰の顔からも血の気は失せて、ただ固く手を握り肩を抱き合うばかりであった。

ようやく二震がおさまると人々は自分の家に帰って行ったが、藤田らは家の中には入らず空き地に台や布団を持ち出し、そこに居場所を作った。「家の中へ入って行きたくても、半ば傾いてしまった家は、崩れ落ちた壁や、振り落とされた柵のもの、横倒しになった家具のため足を踏み入れることも出来なかったし、波状的に襲って来る余震のため、いつ、どきりと潰れてしまいか知れなかったからである。」と説明している。その晩はそこで野宿をすることになった。「間をおいてはやり返して来る無気味な余震と、刻々とあたりを包んで来る闇の恐ろしさに、私たちは固く寄り添うばかりであった。」と記されている。そのうちに、闇の中から「朝鮮人の襲撃があるかも知れませんが、気を付けて下さい。井戸の中に毒物など投げ込まれる恐れがありますから充分注意するように」といい触らす声が聞えてきたという。「私たちはますます恐ろしくなり、今にもこのうしろの大きな榎の樹の陰から武器をたずさえた朝鮮人が飛び出して来るのではないかと不安で背筋が凍った。」と記している。一方、「弟たちの眠っている台の端の方に腰かけたままの位置で静かにあお向けになると、こまかい星がキラキラとまばたいていた。」という記述もあった。だが、藤田はいっしょに眠ってしまった。

ふと目が覚めたのは二日の未明であった。「足元の雑草がしつとりと朝露に濡れて、まだあたりは薄暗かった」。そのうちにあたりも白みはじめた。「やがて太陽のぼつて来たが、私はあんな恐ろしい太陽の色を初めて見た。まんまるく、ぞつとする程大きく、そして黄ともつかず、くれないともつかず、不気味な色に濁つて、じつと見ていると、もっと不吉なことが起こって来る前触れのような気がした。」と記されている。震災当日の天候、その夜に見た星空、そして翌日の太陽と、自然が事細かに記されていることが注目される。藤田は弟を連れ通りまで出避難する人々を見ていたという。「道玄坂を世田谷方面指して登って行く人々は

裾もはだけ、袖口や袖付のほころびもそのまま、死人のように青ざめて、やっと歩いているというふうであった。なかには、すでに息も絶えたと思われる幼児を背に、杖にすがった母の姿もあった。」と記している。夜の七時頃になって、「今ここへ朝鮮人が来るからすぐ逃げる仕度をするように」との触れ込みがあった。父親と叔父は夜警に当たらねばならなくなったので、母親と一緒に避難することにした。「家を出る時、私たちは山と川の合言葉ということを教えられ、誰かがもし山と言ったら、すぐ川と答えなければ朝鮮人とみなしてすぐ殺されると言われた。」と記している。道玄坂を上りはじめ半町とも行かない頃である。「そらッ、朝鮮人が来たぞッ」と、誰かが叫んだ。ぞろぞろ歩いていたら人達はわつと浮き足立って駆け出したが、先きの一人が物につまづき、みる間に十人程の人が将棋倒しになった。「わあッ」という子供の泣き声、「助けてえ」という大人の叫びに、俄かに凄惨の気がみなぎって、私たちは生きた心地もしなかった。」と記されている。それでも何とか中川邸跡まで辿りつき、そこで腰を下ろした。「見れば昨日から燃え続けている下町の火は衰えも見せず東の空を焦がし、余震は絶え間なく大地をゆすつてい」た。不安でじつとしておられず、大向小学校へと足を向けた。学校の庭には大勢の人が集まっていた。不安は消えなかったが、やがて父親が来てくれもとの空き地に戻った。「途中、夜警の人たちから辻々で顔をあらためられ、縄を張りめぐらした関所をこえて、まっ暗な元の空地へ帰って来た時は、すでに夜もだいぶ更けて、ほうき草の陰で心細く地虫が鳴いていた。」と記されている。

三日の朝、千葉に住んでいる伯父が訪ねて来てくれた。米を背にし握り飯を下げて遠い道を訪ねて来たのである。伯父は涙を落とし、父も母も同じように泣いていた。伯父はしばし体を休めると千葉へと帰って行った。その日は雨になったと記している。四日、五日とたつうちに屋外の暮らしにも慣れ、余震も遠のき、また「朝鮮人の噂」もいつの間にか立ち消えていた。十日頃からは、夜だけ大家さんの一間に泊めてもらうことになった。十月の下旬、家が元通りになり一カ月ぶりにわが家で寝られるようになったという。

時間的にはやや後のことになるが、「明けて十三年、一月十三日の未明、かなり大きな地震があった。」と記している。小林恒子は一月十五日と書いていたが、

明け方であることは共通している。「又かッ」と、床の上にはね起きたが、外へとび出す程には至らなかった。雪かと思うほど霜の深い朝であったという。

大岡昇平(注18)は松濤の自宅にいた。大岡は青山学院中等部に通っていた。八月の末に家族、親戚と一緒に逗子へ行った。滞在は一週間程の予定であったが、姉が体調を崩し九月一日の朝に発ったという。「申すまでもなく、九月一日は関東大震災の日である。」「予定通り滞在していたらどんな目に会っていたかわからない。朝の九時頃の電車で発って来たが、もうひと電車おくれいたら、横浜か川崎で地震に会ったはずだった。」と記している。「十一時半頃、家に着き、父と私は裸になって、縁側に出て涼んでいたところへ、地震が来た」。続けて、「どこからともなく、なにか変な音が近づいてくると思ったら、これまで私の経験したことのない、はげしい上下動が来た。それから前後左右にめっちゃめちゃに揺れた。立ち上って縁側の硝子戸につかまったが、その手はずれてしまうほど、激しかった。庭の植込の石燈籠が互い違いに三つに割れて崩れ落ちる不思議な光景を見た。父と私はほとんど同時に、目の前の揺れる地面に飛び降りた。」と記されている。だが、被害は屋根瓦と壁の一部が落ちただけで、大きな怪我をしたものはいなかった。しかし、しばしば余震がくるので庭の隅に避難した。「そこからは坂の下が見通せた。東京の方に煙が立っていた。入道雲ぐらいの高さで、最初は雲だと思っていたが、下へ行くほど黄色っぽい色になって、もくもく動いているので、煙だとわかった。」と記している。夜は家で寝た模様である。

翌日は余震も少し間遠になったが、各地の火事や被害状況が伝わって来た。正午過ぎになって、「横浜の朝鮮人が群をなして、東京へ上って来るといふ流言が伝わって来た。」「二子玉川まで来ている」とのことだったが、間もなく「三軒茶屋まで来た」という噂が入った。それから神泉町にある「弘法湯まで来たということになるまでに、五分とかからなかった。」という。自宅から弘法湯までは五百メートル程しか離れていなかった。「ラジオのない頃で、情報がどうして入ったのか、覚えはない。誰かそんなことを表を怒鳴って歩く人がいたような気がする。」と大岡は加えている。家族は鍋島侯爵邸の庭に避難し、そこで夜を過ごした。

三日の午後、買い物か何かで道玄坂へ行く途中、坂下で大向小学校の先生が自

警団に訊問されているのを見た。大岡がかつて通っていた学校の先生である。「その先生は丈が高く、団栗眼で、髪が縮れていた。少し異相を呈していたので、咎められたのである。」と説明している。「バビブベボをいってみる」といわれたので、大岡は「この人は大向小学校の先生だ」といった。しかし、自警団の人は聞かない。「とにかく「バビブベボ」をいえ」と意地になって繰り返し、先生もまた意地になり応じなかったという。「朝鮮人は濁音がいえず、パピブペポになると信じられていた。」とここでも説明が加えられている。「私はそのまま通り過ぎたが、この事件は少年に大人に対する尊敬の念を失わせるのに少なからず貢献した。」と記している。

何日のことかは記されていないが、大岡は被害を見るために出かけた。「まだ路面電車は動いていなかった。青山学院の前あたりから、道傍にすいとん屋が並び出した。」「日射しはきつく、通行人は白シャツ姿の者が多かった。すいとん屋の屋台もなんとなく白っぽい感じだった。」とその時のことが記されている。だが、「そんな店が青山通りをどこまで行っても続いているので、なんとなく気が悪くて引返してしまった。」と、それ以上のことは記されていない。学校は中等部の校舎と講堂にひびが入っていた。すぐにバラック建築を建てはじめたが、完成するまでは休校となった。「震災は私たち子どもに取って、夏休みの延長ということだった。」と記されている。学校は十月中旬に再開されたが、授業は二部授業となった。一時間を三十五分にし、午前午後にそれぞれ五時間の授業を行なったという。大杉栄、伊藤野枝、甥の宗一が甘粕大尉に殺されたことについても詳しく記されているが省略する。ただ、次の部分だけを引いておく。「子供にとってショックだったのは、殺された中に、宗一という子供が入っていたことだった。一日も早く大人になりたい年頃だったけれど、キリスト教や「赤い鳥」が天真爛漫で、神のような罪のないとしている子供を、事件の発覚をおそれて殺したことが、軍人というものは何をするのかわからない、という印象を与えた。」

佐々木孝丸(注19)は代々木の自宅にいた。『種時く人』創刊メンバーでもある佐々木は、プロレタリア演劇運動に励んでいた。「おそい朝食をすませて、さて、ぼつぼつ叢文閣へ顔出ししようかと、着替えのために浴衣を脱ぎかけた途端、グワ

ラグワラときて、そこらじゅうのものが引つくり返つた。地震！ 大きいぞッ！
 ……本能的に私は玄関先きへととび出した。」と記している。佐々木は叢文閣から出る有島武郎全集の編纂の仕事をしていた。妻は裏で洗濯をし、娘は原っぱで遊んでいた。家の中にいたのは佐々木一人だった。「玄関へ出てみると、原っぱにいた筈の文枝が、家の中にはいるうとして、ぐらぐら大揺れに揺れる格子戸にしがみついている」。娘を何とか引き離して親子ともども無事であった。「安普請の貸家でトタン屋根だったから良かったようなものの、もし瓦ぶきだったら、崩れ落ちる瓦に打たれて、どちらも大けがをしたであろう。」と記されているが、妻のことについては記されていない。佐々木はそれから叢文閣へと向かう。「足ごしらえをかため、洋服のポケットに有り合せた塩豆を一握り入れて、そいつをぼりぼり噛りながら、牛込までテクテク歩いて」行った。幸い叢文閣は無事であったが、「市の中央部から下町方面は一面火の海であることが分つた。」という。「朝鮮人」に関する「悪質な流言」についても触れている。また、大杉栄、伊藤野枝、橘宗一が甘粕大尉らに殺されたこと、そして平沢計七、川合義虎ら九名の南葛労働組合員が刺殺されたことについても触れられている。

青野季吉（注20）は新宿駅の南口近くの路上にいた。プロレタリア文学の評論家であった青野は、神田にあった『赤旗』編集所へ行くため、代々木にあった自宅から歩いて新宿駅に向かっていった。新宿あるいは西新宿かと微妙なところだが、一応代々木としておきたい。「とつぜん電車が止り、道行く馬がバタバタと横倒しになり、屋根々々が盛り上ってカワラが降って来、れんがのヘイが崩れ落ちた。」と記されている。続けて、「その夜は、気味わるく一面に赤黒く染まった夜空をながめながら、ひっきりなしの余震におびえて、練兵所の原で夜を明かした。」と記している。大杉栄、伊藤野枝が憲兵に殺されたことに触れ、「最初は自分の耳を疑つたが、慰問がてらに訪ねてきた新聞社の人たちによってそれが事実だとわかると、わたしは容易ならぬ事態の到来を全身に感じ、ゾツとして自分の身辺を見回すような気持になった。」と記している。また、「朝鮮人の大量虐殺」にも触れている。その現場を見たことはなかったが、「ただ一度、六本木の女学校につとめていた妹の安否を気づかかって訪ねて行った帰りに、四谷見附のあたり

で青竹をもって見張っていた町の壮者の一群に朝鮮人と間ちがえられて危い目会い、その時、朝鮮人らしい青年が引き立てられて行った光景を見た」と記している。また、南葛労働組合の九名が惨殺されたことにも触れ、「わたしはその犠牲者の二、三と直接交わりがあったので、怒りに燃える気持を抑えかねた。」と記している。

入江たか子（注21）は千駄ヶ谷の自宅にいた。入江は文化学院に通い、画家を目指していた。「その日は、妙に朝から重苦しい空模様で、鬱陶しい天気だった。」という。続けて、「日頃元気な庭の樹木もこの日ばかりは、ぐったりと首を垂れて、身動きもしないで息苦し相であった。」と記している。母親が、里の京都へ旅立つべくトランクに身のまわりのものを詰め込んでいた。祖母の遺産である借家売り払うためである。父親は前年に亡くなっていた。「母が玄関へトランクを運んだ……その時であった」。「ドシンッ！」と「床下の地面を大砲の弾丸が打抜いたような気味悪い音がして、母も私も、足もとをすくわれて危く其場に倒れかかった。鴨居がひん曲つて、私達をかばって起上った母の頭に、壁が剥れて蔽いかぶさつて来た。」という。続けて、「地響きがした。屋根から瓦が容赦なくなだれ落ちて、庭石の上で粉微塵に砕けて土煙りをあげた。苔のはえた庭が幾筋もの溝をつくつて、痛々しい地割れをした。」と記されている。入江は庭へ避難しようとした。「その時築山の大きな石が自棄くそのように転つて来て「アッ」という間に」「圧しつぶされそうになった」。だが、兄がやって来て力の限り引張ってくれ、幸い圧死をまぬがれることができた。家は半壊し、家族みんなで呆然と見つめていた。「半鐘に気がついて街の方へふりかえった時には、東京の空は真赤だった。」と記されている。

豊島区

真船豊（注22）は雑司ヶ谷の自宅にいた。早稲田大学の学生であった真船は、八月三十一日の夜に長い旅から東京に戻つて来たという。「その夜、しきりと、まるで合戦のやうに、墓地の森で、ふくろ、うが鳴き合った。」と記し、「珍しい喧しいその鳴声を、不思議に思つてゐ」たと述べている。真船が住んでいたのは墓

地近くにある知人の家の二階であった。地震発生時のことについては記されていない。「その翌日、関東大震災であった。その時の非常なショックを私は忘れない。」と記されているだけである。続けて、「九段坂の上から、品川の海が目の下に直ちに見えたほど、黒々とした東京の街が、どこまでも原っぱになったの眺めた時は、世の中もこれでお終ひだ、と本気で思った。」と記し、さらには「アメリカの軍艦が、食糧を満載して品川沖に着いたといふ町角のビラを眺めた時は、私は手ばなしで泣いた。」と記している。少々激しやうい性格のように見受けられるが、「恐しい虚脱に、どうしてよいか分らぬ自分を、その頃、どうしようもなかつた。」というのは正直な気持ちだったのであろう。

渡辺順三(注23)は池袋の自宅兼印刷会社にいた。プロレタリア文学派の歌人であった渡辺は、震災の年に印刷会社をはじめていた。「地の底からもくもくと盛りあがるような感じと、ゴーツという地鳴りのような音がきこえたかと思うと、大きくガタガタと家が揺れた。柵から何かの落ちるもの音や、近所の人々が戸外にとび出している気配が感じられた。つづいてまた大きく揺れた。」と記している。渡部は、「活字のケースが倒れては大変だと思つて、両手をいっぱいひろげて、からだごとケースに押しつけて、ケースの崩れ落ちるのを防いでいた」。しかし、「手の届かないところのケースは、下から崩れ落ちて、活字が音を立てて散乱している」。三人の職人と妻は庭の真中にある桜の木にしがみついている。妻から早く外に出ることを促されたが、依然活字のケースにしがみついていた。「そのうちにまた大きく揺れて、戸障子がバタバタ倒れる。窓を見ると、窓わくが右に左に菱形になつて揺れている。「なるほどこれは大変だ」と恐ろしくなり、ついに庭に飛び出したという。余震もややおさまってきた頃、家の中に入った。「二階に上つてみると、柵の上の物は全部落ちて畳の上に散らばっているし、水差しや鉄瓶もひっくりかえり、水が流れている。その上に、柵にあった砂糖壺が落ちて、砂糖が水の中でひとかたまりに溶けている。本柵もひっくりかえつて、本がその中に散乱している。足の踏み場もない惨状である。」と家の中の様子が記されている。「階下の工場も、ケースがみんな倒れてしまつて、こぼれた活字が山になっていた」が、手のつけようもないので再び戸外に出た。「その夜は庭で野宿をす

ることにして、桜の木を中心に雨戸をまわりに立てかけたり、屋根を作ったりして、とにかく野宿の準備をした。」と記されている。

その日の夕方まで、「まさかあのような大地震だとは思つていなかった。」と渡辺はいふ。家の付近では倒壊した家もなく、出火もなかったからである。ただ、「東京の中心と思われる方面の空に、何ともいへぬ異様な形をした雲がもくもくと湧き上つていること」を不思議に思つたという。それは「雲でなく煙だ」という人があり、「三原山の爆発だろう」、あるいは「箱根あたりのどこかの山の噴火ではないか」という者もあつた。だが、日が暮れるにしたがつて、「下の方から赤みがさしてきて、はっきり火事だということがわかつた」。その頃になると、東京の中心部から避難して来る人々が見られるようになった。その中の一人に聞いてみると、「東京全市が火の海で、もう神田も日本橋も焼野原になつている。そしていま大塚、巣鴨あたりがさかんに燃えている。」ということであつた。「夜になると空はいよいよ真赤に染まり、人々の顔にもそれが反射して無気味だつた。こうして不安と恐怖に包まれたまま、私は一睡もせず夜を明かしたのである。」と記している。

翌二日。夕刻ころから、「不逞鮮人」のデマがあちこちから聞こえてきた。「鮮人数十名が浦和の監獄を破つて逃走し、途中次第に人数を増しながら、武器をもつて東京に襲撃してくる」と触れまわっている男がいた。すると警官は、「各自武装して防衛してください」と怒鳴つて歩いた。「今夜豊島師範に鮮人が放火する計画がある」、「戸外にある井戸に毒薬を入れるかも知れぬから注意しろ」などと触れまわっている男もいたという。町々ではそれぞれ自警団が組織され、各戸から必ず一名を出せということになり、渡辺も手ごころな棒を持つて家の前に立つた。それぞれが独自に武装して警戒した。

私の家の近くに上田という帝大教授がいて、この人とは日本刀の拔身をさげて自分の家のまわりを歩いていた。また近くのある医者の子の看護婦が、うしろ鉢巻で薙刀をもつて立っていた。床屋のおやじさんは猟銃をかついで、「敵はいま——」などと得意になつて怒鳴つて歩いていた。私の家の隣りは大工さ

んだったが、その若い職人たちは、長い竹の先端に商売道具のノミを縛りつけてかついでいた。

「通行人はいちいち呼び止めた。「もしもし、どこに行きますか」、「どこから来ましたか」などと聞き、「その発音が少しおかしいと、朝鮮人ではないかと濁音をいわせてみる。そしてそれがはつきりいえないと、「お前は朝鮮人だろう」といって、たちまち寄つてたかつてなぐる蹴るがはじまる」。こうして、「何の罪もない朝鮮人が、震災後の数日間に、東京だけでも何千人という多数が虐殺された」と記されている。「私は何人かの朝鮮人のむごたらしい死体を見たが、私の生涯のなかでもっとも不快な印象として、いまもなお記憶に残っている。」と渡辺は感想をもらしている。また、平沢計七、川合義虎らが殺された「亀戸事件」や、大杉栄と伊藤野枝、甥が惨殺されたことにも言及している。震災のどさくさが幾分静まったあとも、何も手につかず毎日ぼんやりと過ごしていたという。だが、「九月の末ころになると、各方面からいろんな印刷の注文が来た。」と記されている

三宅正一（注24）は池袋にある建設者同盟の二階にいた。「裸で机に向かい本を読んでいた。むし暑い気持ちの悪い日で」、「新聞紙の禰をして、だから流れる汗をふきながら本を読んでいた。」と記しているが、「新聞紙の禰」とはどういうことなのか、またなぜそれをしていたのかはよくわからない。ちなみに、しばらくしてから三宅らのことを、「新聞紙の禰」という見出しで報道したといっている。「突然、ガタガタとゆれ出して、かけてあった額縁が頭の上へ落ちてきた。あわてふためいて、机の下へ頭をつっこんだ。一、二、三回余震を感じたのち、新聞紙の禰のまま外の空地へと飛び出した。」と記されている。翌二日、「朝鮮人が井戸へ毒を入れるとか、朝鮮人の暴徒が横浜方面から進撃しつつあるとか、社会主義者が暴動を計画しているとかの流言飛語がどこからともなく飛び出し、池袋でも毎夜各戸から自警団が出て、道筋を警戒することになり、建設者同盟の仲間もこれに加わった。」と記されている。三日か四日かははつきりしないが、三宅は様子を見に早稲田方面へ出かけた。「目白から早稲田へ下った辺で朝鮮人が群集に追われて逃げて来たのをかばったところ、逆に混棒でなぐられてしまった。」

という。「幸い、交番が近くにあったため大事に到らずにすんだ」と記している。なお、三宅の自伝は、これまでもいくつか見たが三人称で記されている。

宮川岸雄（注25）は池袋の自宅にいた。宮川はまだ小学生であったが、「案じられた二十日もまず事無くと思われる無風の晴れた日であった。」とその日の天候を記している。「ちょうど昼食の始まりかけていた時」であった。

突然聞こえて来たゴーツという大轟音と共に、下から一尺（当時の感覚）も大地が突き上げられたような振動を今でもはつきり覚えている。私は思わず、「地震だッ」と庭に飛び出したが、右手に昼食の箸を持ったままであった。庭から家の中を見ると、家の柱も床も襖もびよんびよん跳びはねているように縦に揺れている。六畳間の天井からコードで吊り下げられた電球が、傘ごと、ぶるんぶるんと部屋の中を廻転し、壁にぶつかりそうになっている。弟や妹は、わが屋に残された父の時代の唯一の遺産の大きなオルガンのかげに青ざめてちごまっている。襖や障子やガラス戸がばたばたと外れて倒れ、部屋中に埃が舞っている。ふと足許を見ると、庭に立ってかけてあった物干竿が地面からびよこんぴよこんととびはねていた。

オノマトペを多用した独特な表現をしているが、その様子はよく伝わってくる。最初の激震がおさまったあとも余震は頻繁に起こった。宮川らは庭の縁台の上に集まっていたという。「その時母は留守だったらしい。母がどこへ行っている、いつ帰ったかは覚えていない。」と述べているので、小学生の宮川と弟妹だけだったであろう。「間もなく、東南の空に入道雲のような煙のかたまりが立ち昇り、もくもくと下から噴き上げて大きくなっていた。」煙は夜になって真つ赤なかたまりとなり、それから二日二晩消えなかった。」と記している。夜はみなで縁台の上で寝たという。「朝鮮人騒ぎ」にも触れ、「井戸に毒を入れて廻る不逞の者がいるとの報ですから厳重に警戒してください」という言葉や、「朝鮮人が押し寄せて来るそうだから、どの家も戸締まりをして、中に入っていない下さい」という言葉が、今も耳に残っていると述べていた。また、「自警団は竹槍などつくっ

て持ち出して街角に屯し、縄を張ったりして通る人を糾問した。朝鮮人は「ガ」の発音が消音となるので、カ(KA)と言ったら刺すのだ、と真面目に言っていたものもある。」とも記されていた。学校がはじまったのは十月の半ば頃だったという。火災で焼けた地区の生徒や先生が「越境」入学して来た。「この際だから」という言葉がやはり、「復興」が合言葉になった。また、「バラック」という言葉が一般に使われ出したのもこの時からだったといっている。さらには、はじめは「復興省」の構想が格下げされ「復興院」になったとも記されている。

桑沢きぬ(注26)は巢鴨付近の自宅にいた。巢鴨とはつきり判断することができないうが、その付近であることは間違いない。その日の昼食は洋食屋に注文をしていたという。「もう来るだろう」と楽しみに待っていた時であった。「いきなりグラグラと来たのでございます。咄嗟に、地震だ！と思いましたが、あとはもう夢中でした。」と記している。夫の指示で庭にある大木まで歩いて行こうとしたが、「家からいくら離れていませんのに、地面がゆれるので上手に歩けない」状態だった。だが、言うようにして何とか辿り着いた。大木は「大きな根を張っていますので、ここなら大丈夫だろう」ということで、しばらくみんなで木につかまっておりました。」と記されている。間もなく、夫の実家から人力車が来た。妊娠していた桑沢の体を気遣って回してくれたのだった。すぐに人力車に乗り、十五分程で義父の家に着いたという。庭には早くも急ごしらえのバラックが建てられ、その晩はそこで過ごした。そこには四日いて、また家に戻って来た。幸い家はどこにも損傷がなく、何一つ壊れた物もなかった。「地震がおさまっても、朝鮮人が東京中の井戸に毒を入れるとか、下町の火事は朝鮮人が火つけをしたのだとか、いろいろなデマが飛んで、しばらくは世の中が騒然としておりました。」と記されている。また、「お米なども配給制になり、一刻非常時のようにになりました。が、やがて時が経つにつれてまただんだんと復興し、世の中も落ち着いてまいりました。」と記されていた。

北区

勝目テル(注27)は滝野川の知人宅にいた。八月三十一日に夫とともに部屋探

しに来て、その夜はその知人宅に泊ったのである。九月一日は土曜日だったので午前中に病院に行くつもりであった。婦人病にかかり手術を必要とする体だったという。しかし、その日は「ひどい吹きぶりなので、見合わせていた。」と記している。「吹きぶり」とだけあるので、ただの強風なのか雨交じりであったのかはわからない。「正午二分まえ、まったく予想もできなかった、大激震がおそってきた。」と記し、続けて「二階でひとりだった私はあわてて、かいだんをとりおりようとしたが、そのかいだんは、ぶらんこのようにゆれている。どうしてとびおりたか夢中だった。家家のガラスはすさまじい音をたててくずれ、どぶ川も、大きなうねりをみせて、この世の中の終りではないかと思われた。そのはげしいしんどうは、いつまでもつづいた。」とひらがなを多用して記している。空き地に避難し、その夜は外で一晩を過ごした。方々から火の手があがり、「東京の空は黒煙につつまれ、大地は不気味なしんどうをやめなかった。」と記されている。

二日になると、「どこからともなく、社会主義者や朝鮮人が、ぼうどうをおこしたという、うわさが流れてきた」。不安に襲われた勝目は、一時も早く東京から逃げ出すことにした。三日の夜明けに知人宅を出、避難民の群れに交じって赤羽駅の方へ歩き出した。「火はまだゆれうごく大地の表面のすべてのものを、やきつくさねばというように、しつように、もえさかっていた。」とその時の様子が記されている。また、「時おり、朝鮮人がいるぞつ、社会主義者があぶないぞつと叫んで、竹やりや棒などをもって、はしりまわっている自警団のすがたをみると、私たちは、たえずせなかに、やいばをつきつけられているようだった。」とも記されている。荒川まで辿りついた。鉄橋は無残な姿になっていたが、工兵隊の小舟で舟橋が作られていた。だが、何万人という人が押しかけて容易には渡れなかった。そのうちに勝目は気を失ってしまったという。やがて正気に戻り、橋も何とか渡ることができた。それからのことは詳しく記されていない。「四日目に、やっと私たちは長野市までのがれることができた。」といっているが、「四日目」というのが四日のことなのか、三日の出発から数えて四日目なのかは不明である。貨車で長野駅に着いた時には足がふらふらとして歩けなかったが、赤十字の救護班が助けてくれ、その晩は旅館で休むことができたという。あくる日、列

車に乗り夫の故郷である金沢に向かい、日が暮れた頃に到着した。

住井すゑ（注28）は田端の自宅にいた。住井は講談社を退職し、農民文学運動家の大田卯と結婚したばかりであった。朝九時過ぎ、にわか雨が降り出しそれが晴れたと思ったら地震であった。夫が「博文館へ原稿を持って出かけようとしていた」が、「雨が降ってきたから、ちよつと様子を見ていた。」という。「ガタガタガターツと、こうきたからね、なんだろうと、地震という実感がなかった。赤ん坊を抱いて柱につかまったが、「部屋のまんなかへんまでダターツと押されるところか、突き飛ばされた。またダターツとうしろに戻った。だからつかまった柱を中心にあつちに揺れこつちに揺れで。」と記している。それほどの揺れにもかわらず実感がなかったことを住井は、「小さければ地震だということとはわかるけど。あれくらい大きいと、地震だつていう実感がありませんね、なんだかわけがわからない。」と説明している。「ちようど昼だったから、表に豆腐屋さんが通つて、豆腐屋さんが、なんだろう、歩こうと思つても歩けない、それで桶のふたを開けたら、豆腐がなかでめちやくちやになつていた」こと、また「道を歩いてきた人は道を歩けないで、そこにしゃがんだりした」ことを記し、「そのときは、だれも地震とは気がつかなかったんです。」と述べている。「朝鮮人が井戸へ毒を入れるとかなんとかデマがとん」だことにも触れている。「井戸水を飲むのをみんな心配して」いたが、「そんなことはない、みんな生き死にが心配で、どこへ逃げようかと思つているときに、毒なんか入れてまわる余裕が朝鮮人にあるわけがない。日本人がアタフタしているのに、朝鮮人が入れてまわるわけがない」という夫の言葉に納得したという。

近所の人たちはみな近くの小学校や空き地に避難し、その夜はそこで寝たが、住井は避難せずに自宅で過ごした。「赤ん坊を夜露に濡らすのは、カゼでもひかすといへんだから」というのがその理由で、家に蚊帳をつつて寝たというのである。近所の人たちからはそんな馬鹿だ、早く子どもを連れて来なさいといわれたが従わなかった。だが、朝になつたらその人たちに感心された。「外に出た人は、東京が燃えるあの煙がずっときて、みんなノドがくすぐつたくなって、コンコンコンコンせいでセキして、寝るどころじゃなかった。」からである。「うち

はちゃんと蚊帳をつつて寝ていたから、そういうことはなかった。」と続けているが、蚊帳をつつていればなぜ煙を防ぐことができるのかは疑問である。疑問といえば、「合理的に考えたら、そういう揺り返しがくるわけがないのよ。」と、余震を否定してしていることもそうである。なお、住井の自伝は、娘であるジャーナリストの増田れい子との対談という形が中心をなしている。ちなみに、余震を否定する件では増田も、「そうね、揺り返しだつて、くるなら夜中になるまでのあいだにきてる。」と相槌をうっている。地震発生後かなりの余震があつたことは、他の多くの自伝で証言されていることは改めて記すまでもない。

12 東京——中心部 I

新宿区

三遊亭円生（注29）は須賀町の師匠宅にいた。まだ円窓を名のつていた落語家六代目円生は、ちようど外出しようとしていたところであつた。地震発生時のことについては具体的に記されておらず、「俄然あの地震で驚きましたね。」と記されるだけである。家の被害は大したことがなかった。一時間程して三光亭の下足番が訪ねて来て、みなが無事を知らせてくれたのでほつとしたが、そのうちに火事になり焼けてしまったという。三光亭とは、師匠の五代目円生がはじめたばかりの寄席である。もつとも、師匠の円生も当時は橘家円蔵を名のつていた。大阪へ避難することも考えたが、とにかく東京で頑張ることにし、大根を売って歩いたり、七輪を売ったりした。そのうちに、三光亭の焼け跡にバラックを建てておでん屋をはじめた。「おでんの荷を引つばつて四谷から宇田川町……今の浜松町一丁目までさあね、あの辺を随分歩きましたよ。九月一ぱいまアこんなことをしていました。」と記されている。十月一日、焼け残った寄席で興行がはじまり、三光亭も十二月には再建することができた。「大みそかに罹災民慰安興行というのを、木戸無料でやり、明けて十三年元旦から本興行を再開しました。」と記している。藤原道子（注30）は大京町にある知人の家にいた。看護婦をしていた藤原は、「夏の土曜日で医院もひまなので、休んで」知人の家に遊びに行き、その日は泊まっ

たという。行ったのは土曜日のように読めるが、前日の金曜日に行ったのである。翌日、知人と家事見習いとして来ていた娘さん三人で、日本橋の三越へ遊びがてら買い物に行こうと仕度をはじめた時であった。「いきなりぐらぐらツときた大きな地震で体が宙に浮いたような気がしたと思うと棚の上のものが、音をたてて転がった。ぐさつ、ぐさつという感じで家が揺れている。「地震だ！」と「叫ぶと同時に転がるようにして、動いている鴨居の下をくぐりぬけて庭にとび降りた。」と記している。続いて、「余震がひっきりなしにつづいているので怖くて家の中へ入れない。いまのようにテレビもラジオもない時代なので情報も入らず、大地震だとわかっているだけで市内の様子はわからない。」「家の中に入れないので雨戸をはずし、その上にござを敷いて表で一夜を明かした。」と記されている。また、その夜、「朝鮮人が焼き打ちをはじめたとか、井戸に毒を投げ入れたとか不穏な噂が流れはじめた」ことも記されている。

二日になると被害の状況が伝わってきた。「浅草、深川あたりは火災が起きて死人がでたというし、向島は全滅だという。芝の渡辺看護婦会のあたりも焼けたらしい。」と記されている。「渡辺看護婦会」は藤原も住み込みで暮らしていたところで、「私の荷物も丸焼けになったにちがいない。」と加えられている。向島には両親と兄弟がいたので、じっとしていられず、翌三日に向島まで行くことにした。知人には止められたが、袴を履きズツクの靴を履いて知人宅を出た。

四谷から神田に向って歩いた。いたる所で電線が切れてぶら下っていた。崩れかけた家もあれば倒れた家もあり、焼け跡ではまだ余燼がくすぶっている。これが東京の町かと思うほどの変りようだった。

それでもすばしい人間はいるもので、町角でバナナの叩き売りをしていた。私は食料のたしにと思つて、それを買つて背負つて行つた。

神田から少し行くと、焼け死んだ人がごろごろ目についた。両国橋も焼けていたが、橋のたもとに抜身の日本刀を持った男が立っていた。刀の先きから血が滴っていた。ぞつとするような無気味さだった

隅田川には死体が沢山浮んでいた。蔵前橋は焼け落ちていて、太い水道管が

むき出しになっているところを這つて渡つた。

被服廠跡では折重なつた沢山の死体を見た。馬の死骸もあった。隅田川には死骸が浮んでいた

このような光景を見て一層不安になるが、歩きに歩いてやつと向島に辿りついた。両親と兄弟はみな無事であった。向島には二日程とどまり、それから看護婦会に帰つたが、全焼であった。会長はじめみんなは霊南坂教会に避難していることがわかり、そこへ行つた。そこに落ち着く間もなく、藤原は警視庁から救護看護婦として召集されたという。「トラックに乗つて市内を走り回り、病人や怪我人を探して病院に運ぶのである。時には死体も収容した。」「焼けつくような炎天下で、毎日汗みずくになつて働いた。食べるものもなく、支給されるのは玄米の握りめし一個である。たまには立ち売りのすいとんなどを食べたが、夢中だったから働けたようなものだった。」と記している。また、「地震から一週間たつたかたないかの頃なのに、怪我人の傷口にはもう蛆がわいていた。次から次へと必死になつて手当した。」とも記されていた。そのようにして一ヶ月ばかり休みなく活動を続けているうちに、暑さと過労と栄養失調が重なりトラックの上で喀血してしまう。それでも二、三日働いていたが、終に病院で診療を受け静養することになったという。

山田国太郎(注31)は新宿の自宅にいた。陸軍士官学校予科の生徒隊付区隊長であつた山田は、午後から行なわれる野球の早慶戦を見物するため少し早目の昼食を取つた。自分は食べ終わり妻が今から食べようとしていた時であつた。「箸を持った途端、午前十一時五十九分、ゴオーゴオーとうなりを立てて大音の地震がすると共に、家が大きく上下に震動し、揺らぎはじめた。」「たちまち箆筒は倒れ、食卓の料理もゴチャゴチャにひっくり返り、棚のものはすべて飛びように落下して来るので、睡眠中の長男明穂(生後十カ月)を私が、いち早く抱きかかえ、家内は私の背中にとまつて、表通りの出口へ飛び出した。飛び出したけれども震度(マグネチュード)が高いため、立つておれず、明穂を抱いて道路の中央にしやがみこんでしまった。」と記されている。「家内は私の背中にとまつて」

という表現がおもしろい。向かい側には飲料水や氷を売る店があったが、「轟然」としたげしい地響きで、飲料水の瓶が爆発して倒れ、各家々の屋根からは瓦が散乱して次から次へと飛び交うようにして落ちて来た。家は高台にあったので、約一キロ半先に士官学校を見渡せた。その北側ではあちこちと火災が起っていたが、学校は被害が少なかったという。翌日はわが家の被害を整理し、翌々日は上野公園まで出かけ東京の被害状況を眺めたが、学校へは行ってみなかった。「火災、災害等の場合には、真先に勤務先に駆けつけることは軍人として当然の責務であるということを、あとになって悟り、深く反省させられた。」と加えられている。けだしもつともであるが、その程度の自覚さえなかったのは驚きである。五日頃、妻の実家がある横浜へ行った。「すべての交通機関は麻痺状態にあったが、軍服姿であったために、好意ある運転手にトラックに同乗することを許され、無事辿りつくことができた。実家の家業は貿易商であったが、店は全焼し、焼跡の金庫に避難先が記されていた。市内は未だあちこちに火災が残っていたが、避難先から妻の母親を連れて無事新宿の家に帰ることが出来た。

内村祐之（注32）は西新宿の自宅にいた。内村は東京帝国大学を卒業したばかりの医者で、東京府立松沢病院に勤めていた。「大変な激震だとは感じたものの、近所に倒れた家もなく、火事も起こらなかった」という記述があるだけで、それ以上の具体的な記述はない。「電信柱などに貼られた新聞の号外で、わずかに事件の輪郭を知るのみであり、下町の大火災の規模や死傷者の惨状までがわかったのは、数日を経た後のこと」であったという。だが、病院における患者の安全確保には大変だった。「打ち続く余震に、木造の病棟内に患者を収容することが危険なため、七百人に余る患者を終夜、屋外で保護せねばならなかった」。また、「朝鮮人來襲の流言におびえて、近所の人々が病院に避難してきたことから生じる混乱をさしずめ」なければならなかった。「朝鮮人來襲の流言」について、内村は次のように鋭く指摘していた。

この震災を契機として突発した最も顕著な精神医学的の現象は、精神病院の中で起きないで、世間一般の正常人の中で起こった。電波のような速さで広が

る流言蜚語がそれである。多くの精神病者を抱えた病院が襲撃されるなどということは、平時なら夢想だにできないことだが、余震は続くし、確かな情報も何一つ得られぬ不安状態の中では、ささやかな流言も、「もしや」という気を起こさせる。そして多くの人の感じる「もしや」の気分は相寄って、本当だという意味にすりかえられてしまうのだ。

永井叔（注33）は西新宿にある知人宅に寄宿していた。永井は当時、自著出版の資金集めのため「托鉢」に勤しんでいたという。要は、大道で楽器を弾いたり詩を詠んだりして投げ銭を稼いでいたということである。地震発生時のことについては詳しく記されてはいず、ただ裏庭に飛び下り揺れる松の木にしがみついていたと記されているだけである。ただ、やや特異なのは一緒に庭に飛び下りた人とともに聖歌を歌ったことが記され、それが引用されていたことである。翌二日、余震の中を築地や本郷の知人の安否を訪ねた。その際に見た光景であろう、「累々として路傍に横たわる焼（圧）死体！」「怒りの神のなせる最後の審判にも似た、ダンテの綴る煉獄以上のおそろしきさま！」と記している。それから二、三日して急に北海道行きを思いたったという。「ボイズ ビイ アンビシヤスのクラーク先生の住まいされたあの札幌と、都ぞやよい……」の北大が、そこにスズランの如く匂うていたから……。」というのがその理由ともつかない理由である。上野からの列車は超満員だったが、「発車の瞬間に、窓枠へ蟬のようにポイととまった。」といっている。ただでさえ大変だが、「はだかのままのバイオリンと信玄袋、それに風呂敷包」を持っていったというから驚きである。高崎に着くとそこで下車した、というよりも「駅員に窓枠からひきちぎられてしまった」のだという。「大震災の炎波はここへも押し寄せて、全市がざわめき泡立っている」と。駅を出てあてもなく歩いていると高崎教会と書かれた建物が目に入った。その夜はそこに泊めてもらった。ちょうど日曜だったので礼拝にも出席し、バイオリンも披露したという。震災は土曜日であったから、おそらくは八日後の九日のことであろう。しばらくは高崎の地で「バイオリン托行」をしていたが、ある日のこと事件が起きた。

「貴様、朝鮮人だろう！」

と云いさま、私の襟首をつかんだ勞務者風の男があつた。そこへ、バタバタと大勢が集まつて

「やつつける、やつつける！」

という怒号さえ湧き上がつて来た。つづいて

「この大震災だというのに、バイオリン流しとは何ごとぞ！」

と罵る者もいる。瘦せこけた頬面を二、三度なぐりつけた男もいた。私は、その時、突嗟に、東京でいつも持ち歩いてゐた「遊芸稼人鑑札」のことを思い出した。それに、明治二十九年生れと書いてある。

「皆さん、この鑑札で、私が日本人であるということがおわかりでしょう。」

というと、棍棒を持つていきまいていた凄い大男が

「何だ、三字じゃないか！ エイ セイ シュク。叔というのは朝鮮人の名だ！ やつぱり朝鮮だ！」

と云つて今にもなぐりそうになつた。しかし、中に、救いの神もあつて、殺氣立つた群衆をおしわけけるようにして寄つて来た。そして

「うむ明治生まれとあれば、日本人にちがいない。わかつたわかつた。行け行け。だが、バイオリン流しはやめたが好いぜ。」

と云つた。そうして、私は命拾いをしたのであつた。

永井叔という名前を「エイ セイ シュク」と音で読んだというのがおもしろい。やがて永井は高崎を発ち、再び北海道へと向かい、目的の札幌に到着する。

米川正夫(注34)は北新宿の自宅にいた。ロシア文学の研究者であつた米川は、書齋で仕事をしてゐた。「その年は酷暑がつづいていたので、私は猿股一つの丸裸かでテーブルに向つてゐた。」と、先の牧野富太郎と同じ恰好であつた。続けて、「あのもの凄い上下動を受けたとたん、私は直覺的にただ事でないのを感じて、いきなりはだして庭へ飛び下りた。家が倒れかかりそうな気がして、一ばん安全なところは門だと考えつき、よろよろとよろめきながら、左右に流れ動く大地を

かろうじて踏みしめ踏みしめ、ようやく門まで辿りつくつと、いきなり門柱にしがみついた。しばらく左右に振りまわされているうちに、やつとひとまず静まつた。」と記している。「猿股一つの男が門柱にしがみついている恰好は、わきから見たら、さぞ抱腹絶倒だつたらう」と自嘲の言葉も加えられていた。幸い家も潰れず妻も

無事だったが、その朝家を出て行つた長男のことが心配だつたという。「家の中にいるのは危険だつたから、畳を二じょうばかり持ち出して、庭の隅に敷き、台所から飯ひつや、食器や、おかず類を運んだが、いつ揺り返して潰れるかわからないので、家へ入るたびに、私も妻も、戦場の兵士が弾丸のもとをくぐるように、機敏に活動したものである。」とそのあとの行動が記されている。そうこうしているうちに、南の方に巨大な雲が立ち昇るのが見えた。「それと同時に、東の方、つまり下町方面は、一面に煙が立ちこめて、白日なお暗しといったような、すさまじい光景になつてきた。」と記されている。不安と焦燥が募つたが、夕方になり心配していた息子が帰つて来て安堵の胸を撫でおろした。夜になると、東の方の端から端までが赤く染まつていた。

翌日、兄の安否を確かめるため神楽坂近くの稽古場へ行つた。兄は琴三弦の師匠をしてゐた。家は空で、内弟子の若い娘が一人外に坐つてゐた。聞けば、兄は前日高輪の稽古場へ行つたという。米川は娘を家に連れて行き、それから高輪へ行つたが、兄は無事であつた。「その日は、前日に劣らぬ残暑だつた上、焼あとの熱氣と埃のために、途中、息もつまらんばかりだつた。」と記されている。その夜は庭に蚊帳を吊つて雑魚寝をした。庭での生活は三日三晩続いたという。余震は続いてゐたがもう危険ではあるまいということになり、家の中に引き移つた。人々は物資を買い集めてゐたが、「迂愚な私はそんなことに思い及ぶはずがなく、人から話を聞いて駆け出したときには、その種の品々は何一つ残つていなかった」と記している。続けて、「いちばん困つたのは、蠟燭で、手持ちのものが尽きたので、夜は仏壇用の小さなので、ようやく十日間ばかりを過ぎした。米は玄米なら手に入つたので、これも人から教えられて、一升びんに入れたのを、細い棒で一時間くらい気ながく搗いて、ある程度の白米にした。」と記されている。

西條八十(注35)の自宅は北新宿にあつた。西條はすでに詩人として活躍して

いた。地震発生時に自宅にいたとはつきりとは記されていないが、「家は半壊したが、さいわい火災はまぬがれた。」と記している。続けて、「午後になってから「街は火の海だ」「月島が海底に沈んだ」「江の島も、相模灘の大島も、姿を消した」そんな噂が郊外のわたしたちを脅かした。」と記されている。月島には兄弟夫婦がおり、その他下町には肉親や友人が大勢住んでいる。それらの様子を知りたいたいと思い、余震の続くなか家を出た。「徒歩で辿る途上の混雑のために、いつか二進も三進も行かなくなつて、夕ぐれこの山の上に、藻草のようにうち上げられてしまった。」と記しているが、「この山上」とは上野公園のことである。西條はここで一夜を過ごしたが、妻や子供のことについては一切記述がない。「夜に入つて山は荷物を担いだ避難者でいっぱいになった。みんな辛うじてわずかな手廻品を持って出たような人ばかりであった。それでもトランク、行李、箆の片割れ、長持のようなものが、山のようにわたしの周囲に積み上げられていた。人々の面上には世界の終りに面したような悲痛な表情がみなぎっていた。みんな疲れはて、喘いでいた。」と避難民の様子が記されている。さらには、「深夜になると、人々は、疲労と不安と餓とで、ほとんど口をきかなくなつてしまった。化石したように、坐り、蹲み、横たわつていた。」と記されている。そのような中、一人の少年がハーモニカを吹きはじめたという。のんきらしくハーモニカを吹くのを人々は怒りだすのではないかと西條は危惧したが、それは杞憂であった。「曲がほがらかなヴェースをいれて進むにつれ、いままで化石したようになっていた群集の間に、私語の声が上がった。緊張が和んだように、或る者は欠伸をし、手足をのびい、或る者は立ち上つて身体の塵を払つたり、歩き廻つたりした。」と記している。続けて、「一口にいえば、それは冷徹索寞たる荒冬の転地に一脈の駘蕩たる春風が吹き入つたかようであつた。山の群集はこの一管のハーモニカの音によつて、慰められ、心をやわらげられ、くつろぎ、絶望の裡に一点の希望を与えられた。」と記されていた。

香川綾（注36）は大久保の叔母の家にいた。東京女子医学専門学校の学生であつた香川は姉とともに叔母の家に世話になり、そこから学校へ通つていた。その日は頭痛がしたので、研究のために通つていた病院を休んだという。先に見た内村

祐之と同じ松沢病院である。「朝のうちは土砂降りの雨であつたが、八時すぎに叔母が旅行に出かけたあとは、嘘のように晴れあがつた。」とその日の天気を記している。「そろそろお昼にしようか、と姉がいつていた矢先に地震が起きた。「私たちは思わず庭に飛び出した。それから大きな揺れが二度あつた。しばらくしておそろおそろ家の周囲を見まわしてみると、瓦が落ちた程度で、近所の家もたいした被害はないように思われた。ところが、やがて市内には火災が発生し、それからは大騒ぎになった。」と記している。数日後、香川は病院に行った。「標本室の標本のガラスが割れて、ホルマリン漬けにした脳が床の上にごろごろ落ちていたのは、ぞつとした。解剖実習にはへいきだった私も、このときばかりは、なにか、人間の末路を見るような不気味さを通りこした感じだった。」と記されている。

松田竹千代（注37）は大久保にある陸軍中将宅の応接間にいた。有隣園という私設の児童福祉施設で働いていた松田は、園の事業内容を説明するために中将宅を訪れていたのである。「そこへ夫人がお盆に紅茶をもつて、応接間に入ろうとする瞬間、飛び上るような衝撃を受けた。夫人の手にあつたお盆がひっくり返る。隣の建築中の小学校が、大音響とともに崩れ落ちた。閣下も夫人も僕も、夢中でテーブルの下にもぐり込んだ。」と記されている。震動は続いてしたが、挨拶もそこそこにて中将宅を辞し表へ出た。「幅九尺の細い路で、両側にはレンガ塀や木造家屋がグラグラ揺れて、そこを通り抜けるのにも瓦が崩れ落ちてきたり、危険さわまりない状態であつた。」とその時の様子が記されている。園に帰つてみると、「運動場に先生や園児がひとかたまりになって、激しい地震の恐怖に泣き叫んでいた」。それから数日の間は、「なおもつづく余震、物凄い入道雲、朝鮮人が襲撃するというデマやらで、恐怖のどん底であつた。」と記している。そのうちに、東京府のブラック数百棟の管理を任せられた。主な仕事は生活必需品の配給であつたが、託児所や職業紹介所も開いた。その仕事は約一年も続いた。園ではその他迷子の救済にもあたつた。六カ月で約三百人を收容した。「この時、朝鮮人の迷子を引き受けて問題になつたことがある。」という。父親が「朝鮮人」、母親が日本人の三人の子供であつた。「朝鮮人などを收容して、付近に火事でも出されたら、どうするのか」という抗議を受けたのである。この件で松田は憲兵

隊に呼び出されたが、「朝鮮人だといっても、迷い児ではないか、僕は有隣園を十年経営してきて、多くの子供を見てきた経験があるから、絶対に責任を持つ」といい切つて憲兵隊を納得させたといつてゐる。その後も様々な活動を行なつてゐるが、その部分は割愛する。

徳田球一（注38）は富久町の市谷刑務所にいた。弁護士であつた徳田は、暴動を扇動したという廉で捕まり市谷刑務所に収容されていたという。「監獄は昼飯の時間がはよいので、あの日も、がらがらと大揺れがきたのは、ちようどわれわれが昼めしをすませたときだつた。」と記してゐる。続けて、「監獄は一室ごとにふとい柱があつてささえているから、あれほどの大揺れにもよくたえて、ほとんど心配するほどのこともなかつたが、事務所の方は、ひろいうえに支柱がすくないので、非常に揺れかたがはげしく、屋根の瓦がぜんぶおちてしまい、たちまち大さわぎとなつた。」と記してゐる。徳田の独房は事務所の隣にあつたので、戸を開けると要求したが、命令がないから開けられないという。「この危急のさいに命令を待つ必要があるか」と怒鳴ると、看守が来て鍵をはずした。だが、出ているのは共産党の連中ばかりで、他の囚人は依然として部屋に閉じ込められたままであつた。「みんなもだせ、あぶないからみんなもだしてやれ」とまともや怒鳴りつけると、看守は鍵をはずした。各自夏蒲団と莫座を持つて外に出た。ところが、「戸外は、正午をちよつとまわつたばかりで、ひざかりの太陽がかんかん照りつけてゐる。みんなながいあいだ監房にとじこめられていたのが、急にそのひざかりのそとへでたものだから、こんどは日射病にやられてたおれるものでできた。」と記してゐる。徳田自身はそれでもなかつたが、同志の渡邊政之輔と田代常二は全身痙攣をおこし、見る間に顔色がなくなつたという。日射病にやられた連中を除き総勢八百人の囚人が庭に集まつた。監獄側はすぐに軍隊に通報したと見え、やがて軍隊がやつて来て塀の外を囲み、また中庭に入つて囚人たちを包囲した。

その日の三時頃になつて徳田は八百人の仲間に向かつて演説をしたといつてゐるが、はたしてそのようなことが許されたのであろうか。それはともかく、演説の内容は、非常時につき全員釈放するよう要求しようという大胆なものであつた。

むろん、要求は受け入れられなかつた。が、それが駄目なら代表者数人を刑務所から出し、外の様子を報告させるよう再度要求した。これまた要求は受け入れられなかつたが、刑務所の役人が報告することを約束したという。しかし、そのようなことがあつたためか、囚人はまたぞろ手錠をはめられる結果となつてしまつた。

二日は雨であつた。「この雨のおかげで、われわれはまた監房のなかに入れられてしまつた。」と記してゐるので、一日の夜は中庭で一夜を過ごしたものだと思われる。その翌日であつたか、軍隊が集結し一人一人を引っ張り出し監房の入れ替えをはじめたという。「すこしでも反抗がましいことをするものにはたいしてはなぐる、ける、そのほか、ありとあらゆる暴行がくわえられた。」と記してゐる。それから間もなく、「血みどろなつた一群の人たち」が次々とトラックに運ばれてきたという。「それはすべて「暴動の嫌疑」で逮捕された人々で、そのうちには共産主義者、無政府主義者をはじめ。朝鮮の人々や、労働組合、農民運動の闘士諸君などがいた。」と記してゐる。一月ばかりたつと、また新たな人々が数十人入つて来た。それは在郷軍人の兵士たちであつた。「震災のとき朝鮮人、中国人、共産主義者、無政府主義者などが方々でころされたが、その虐殺犯人のうたがいをかけられた」人々だつたと記してゐる。

野坂参三（注39）も同じく富久町の市谷刑務所にいた。「その日の朝は、前日からの豪雨が十時ごろには止んで、夏も終わりだというのに、照りつける太陽は盛夏のようで、四方が板で囲まれた狭い三畳敷の監房のなかは、蒸し風呂に入れられているように暑かつた。」と記してゐる。「わたしがいつものように昼食の差し入れ弁当を食べ終えて、その空き箱を雑役夫が持ち去つたあと、ひと休みしようと部屋の真ん中に立つた」時であつた。徳田球一がいつていたように刑務所の昼飯は早かつたのであろう、野坂も昼食を食べ終えていた。「突如、地底のほうからゴーツという不気味な響きがしたかと思うと、部屋全体が上下に、また左右に、ガタガタと大きな音を立てて、猛烈な勢いで揺れ始めた。それは、人間がマッチ箱でもつぶすかのように、魔物の巨大な力が部屋を握りつぶそうとしてゐるかのような恐ろしい勢いだつた。」と記してゐる。逃げ出さなければならぬといは

思うが、外に通じているのは鉄の棒と金網とがはめられた高い所にある小さな窓しかない。そこから出ることはむろん不可能だが、野坂は夢中で飛びついたという。顔半分がようやく窓縁の上に出た時である。「窓の向こうの煉瓦造りの大きな炊事場が、高い煙突もともに、轟然たる音を立てて崩壊したのである。濛濛たる砂煙は、風にあおられて、わたしの窓にまではいらうとした。」と記されている。これはいけないと思ひ、反対側の出入り口の扉を力いっぱい叩き、小さな「視察孔」に口をつけて「出せ！ 出せ！」と大声で連呼したが何の反応もなかった。その時、「天井に異様な音がするので、眼を上げると、驚いたことに、天井からぶら下がっている五燭の裸電球が、グルグルと輪を描いて、ひどい勢いで回り、いまにも天井にぶつかりそうになってい」た。「もしぶつかれば、粉々に砕けた硝子の破片を、わたしは頭から被ることになる。咄嗟に、わたしは部屋の間にある蒲団を頭の上に載せ、両手でささえて畳の上になぞくま」た。「と記している。それでも何とか脱出しなければと焦っていると、突然扉が開き、「早く出なさい」という鋭い声が聞こえた。野坂は急いで中庭に飛び出した。それと前後して、堺利彦をはじめとする仲間が次々と出て来たという。だが、徳田球一もいつていたように、出て来たのは仲間ばかりで他の囚人は閉じ込められたままであった。その後全員が中庭に出されることになるのだが、あとで聞いた話として、「監獄当局は、混乱を避けるために、在監者の全員を一挙に監房から出さないで、看守の監視のもとに、一集団ごとに広場に誘導したので、約千人（記録では千二十名）が全部合流するには、たしか半時間以上はかかったようだった。」と記している。このあたりの事情は徳田のいつていたことは少々異なり、中庭に集まった人数も異なっている。徳田は八百人といっていた。

中庭に出てから三十分程経った頃である。「ひととき激しい余震があった。わたしは、足がフラフラして尻もちをついたほどであった。このとき、監獄全体の巨大な建物が音をたてて左右に揺れるのがハッキリ見え、屋根から瓦がなだれるように落ちて、地上で砕けた。同時に、監房の窓から助けを求める悲鳴は、いっそう凄愴になってきた。」と記されている。徳田も言及していたが、渡邊政之輔と田代常二が倒れたことも記されている。「急に強い太陽にあてられて日射病に

なったのか、あるいは脳貧血を起こしたのか」といつているが、もともと「体を悪くしていた」とも述べている。徳田が演説をはじめたことにも触れ、すで見ただ徳田の自伝をも引用している。徳田の言と重なる記述が少なくないのはそのためでもあろうが、見てきたように異なる部分もまた少なくない。

夕食は四時が定時であったが、大分遅れて暗くなった頃に配給された。当日の夕刻に千人分あまりの食事を用意するのは大変であったことは推測に難くない。「事務員や雑役夫を総動員して、瓦礫のなかから鍋や釜、炊事用具、食糧などを掘り出した。そして広場の隅に土砂を盛り上げてかまどを造って、即席の炊事場を築いた。こうして、大急ぎで麦飯と漬物の夕食がつくられたのである。」と記されている。やがて日がとつぷりと暮れて提灯が要所要所に吊るされた。「その夜は、月のない、きれいに晴れた中天に、星がキラキラと輝いていた。」という。しかし、「監獄を中心に東西南北の空は真赤に焦げ、とくに東の下町のほうが赤みは濃かった。そして、遠くのほうからゴーツという騒音が聞こえてきた。」と記されている。九時過ぎになって、地べたに藁座を敷き蒲団をかけて横になった。翌二日、いつても午前一時を過ぎた頃のことであった。弁護士布施辰治が安否を気づかい面会に来てくれたというが、この非常時に、しかも夜中の一時過ぎに面会が許可されたのは驚きである。朝の五時になり起床の号令がかかった。「まだ薄暗かったが、昨日から気になっている東方の空は、多少は色が薄くなっているものの、依然として赤く焼けていた。そして、例の不気味なゴーツという騒音も、やはり聞こえていて、火災はなお広がっていることがわかった。そして、まだ余震も続いた。」と記されている。午後になると、被害状況などが断片的に耳に入ってきた。「情報のルートは、雑役囚が、接触する職員や外来者たちの会話を小耳にはさんだものを伝える」もので、「本当のこともあるが、またデマや荒唐無稽な噂もあった。」と述べている。たとえば、「神奈川県江之島の海中に陥没して、滋賀県の琵琶湖に新しい島が突出した」とか、「東京全市が焼け野原になった」とか、「津波が品川に押し寄せて水びたしになった」とかいうものであった。だが、特に怒りをかきたてたのは、「朝鮮人が集団で井戸に毒を投げ込んだり、放火したりしてあばれている」とか、「社会主義者が暴動を起こした」とい

うものであった。だが、不安と焦慮の中一つの朗報が入ったという。安否を気遣い、また無事を知らせるために妻が刑務所を訪れ、今しがた帰ったという知らせであった。夜中に弁護士との面会が許可されたにもかかわらず、妻との面会が叶わなかったであろうか。なお、妻には震災時のことを記した手記があり、それが引用されている。地震発生時と刑務所を訪ねた部分を引用しておきたい。

大正十二年の九月一日の大地震には、丁度学校の夏休みで神戸から出てきていた弟と二人で、宅下げのものをとりがてら本の差入れや、着がえをもって市ヶ谷へ行った帰り道であったのでした。三宅坂のところまでくると、大地がゆれ出したのです。すぐ電車からとび出して余震のつづく中を東京駅に歩いて行きました。途中で焼けかかっている警視庁をみて、何かいい気味だという気がしました。

「宅下げ」とは、「入獄者が不用の物品を家人に差し戻すこと」という注が付いている。刑務所には前日の一日にも訪れていたことになる。燃えかかっている警視庁を見て、「何かいい気味だという気がしました。」という気持ちはわからないでもない。夜は理化学研究所の建築場で一夜を過ごしたという。翌日、巢鴨の知合いの家に行き、家に帰ることにした。

途中、野坂のことが気になりますので、まわり道をして市ヶ谷へ行きました。もちろん、中に入ることはできませんでしたが、ちょうど運よく刑務所の近くで、大野木(?)という看守長に会いました。その人が、野坂さんの奥さんですかと聞いて、呼び止めました。私は途中で地震にあつて、ようやくここまで来たのですが、中はどうでしょうか、とききましたら、無事ですから、御安心なさい。あなたが見えたことを伝えて上げますといって、すぐ刑務所の中へもどって行ってくれました。

あとでききましたら、家族の安否が中へ知れわたったのは、私のことが一番先きだったそうです。

親切な看守長もいたものである。妻はそもそも面会を申し込んだ訳ではなかったようである。なお、妻の手記は一九四八年二月の『大衆クラブ』に掲載されたことが記されている。

ところで、徳田は非常時につき全員釈放を要求し、それが駄目なら代表者を刑務所から出し外の様子を報告させるよう要求したが、結局受け入れられなかったといっていた。野坂はそのいきさつを実に詳細に記しているが、割愛する。徳田は軍隊の出動についても記していたが、野坂もまたそのことに触れている。「地震直後に、刑務所長は政府に軍隊の出動を求めて、近衛歩兵連隊の一部が刑務所に配置されたそうである。」と記している。だが、それは主として外の警備に当てられ、囚人の目の前には姿を現さなかったといっている。だが、要求が受け入れられず不満の声が高まってきた二日には、軍隊を中庭に導入したという。

夕食も終わりあたりが暗くなった頃である。野坂は莫塵の上に横になっていた。「そのとき、急に、あたりが騒がしくなったと思うと、看守がドヤドヤとやって来て、先ず、わたしたち共産主義者に手錠をかけた。そして、やがて囚人全員に手錠をかけてしまったという。時系列は少々違っているが、徳田も手錠のことについては触れていた。だが、「こうした高圧手段だけに依存することは賢明でないと思ったのか、囚人の要求を容れたような恰好で教戒主任を市中に派遣して、市内を視察させ、その情報を囚人に報告させるという処置を講じた。」と記している。徳田は、件の要求の際にそれだけは約束させたといっていた。八時に就寝の号令がかかったが、なかなか寝付かれなかったという。手錠をかけられたままなのであるから当然であろう。「まだ、余震は断続的につづいており、一日いらい夜空を染めていた淡紅色も消えてはいなかった。」と記されている。

睡眠不足にもかかわらず、三日は朝早く目覚めた。だが、昼間は用便に行くのは自由に歩くことも許されなかった。「九月三日の午前と午後についての私の記憶は、ほとんど残っていない。」と記している。夕食を終えた頃から小雨が降ってきた。雨は間もなく止んだが、その雨を口実に全員が監舎に入れられた。徳田は雨が降り監舎に入れられたのは二日であったと述べていた。どちらが正しいか

はわからないが、野坂にしたがうならば一日二日の二晩を中庭で過ごしたことになる。看守にせき立てられて監舎内の廊下に入れられたが、まだ余震が絶えないからか、廊下に莫塵を敷いて寝るように指示された。「この床は石畳なので、広場のやわらかい草の上とは違って、身体を横にすると、ひどく痛かった。」と記している。「ちょうど、そのころに、東京の南葛飾^{みなみかしか}では、わたしと親しい川合義虎や平沢計七を初めとする労働組合の幹部や共産主義者たちが、次ぎつぎに亀戸警察署に検束されて、その翌朝には軍隊によって惨殺されたのであった。」とも記されていた。翌四日の朝には全員が元の監房に入れられたという。「そして、震災前と同じく、単調で規則づくめの生活がふたたび始まった。しかし、まだ、大地の揺れは続いていたのであった。」と記されている。

入江相政（注40）は余丁町の自宅にいた。入江は第一高等学校の学生であった。「まだ『昼の食事の前』で、『茶席で鷗外全集の翻訳物に、読みふけていた』時に地震が起こった。「たとえば、大きな箕^みで、しゃくつてほうり捨てられるように、すぐ前の庭にたたき出された。自由意思で、出ようと思つて、庭に出たというようなものではなかった。」と独特の表現をしている。続けて、「とにかく、なるべく家から離れた、庭のまん中にいなければいけない。この辺がまん中だろうと、見廻したら、うしろで、石灯籠が大揺れに揺れている。急いでとびのいた。その時大きな石灯籠は、ばらばらになって、どつとばかりに、大木の間の、下草の上に、たたきつけられた。」「これが倒れ切つたとすれば、そこが一番安全と、舞いもどつて、横たわつた石灯籠に腰かけた。まだひどく揺れている。ほかのことはなにも頭に無く、なにも目にはいらない。」と記されている。揺れが鎮まつて、母親や兄も庭に飛び出していたことに気が付いた。ただ、「三人とも、互に全然ひとの姿を見ていない。不思議なようなことである。」と、まさに不思議なことを記している。余震が激しく、その日は夜通し数えきれない程の余震があつたという。三日になって、裏庭で配給の玄米を臼で搗いでいた時に義兄が訪ねて来た。神田で焼け出され、谷中の墓地の茶屋に避難していたということであつた。

吹田順助（注41）は原町の自宅にいた。吹田は、新設されたばかりの山形高等学校の教授であつた。震災については、「当時のことを記した手記」が見つつか

たのでそれを「挿入」と述べているが、そのままの引用とは思われない。「朝のうちは雨であつたが、そのうち雨も上がり、いやにむしむした天気となつた。空は晴れていたが、濃い灰色の雲が大天災か何かの予報でもあるかのように、空にただよっていたように思う。」とその日の天候が記されている。書齋で友人二人と話し込んでいた時であつた。「底気味のわるい地響きと怪しい騒音とに伴われて、俄然として家屋全体が揺れ出した。初めはドシンと来た上下動、それからユラユラと来る水平動、早速畳の上に起ち上がると、足下が回転でもしているように、ヒョロヒョロとよるめく、震動がかなり強くなり、壁がはがれてバラバラと崩れてくるので、八畳の本棚——ドイツから着いた分厚な本の四、五段に積まれた——の下に寝ていた逸夫（四男、当時二歳）を抱いて柱につかまりながら縁側に出るが早いか、分厚な本がドカドカと子供の寝ていた蒲団の上に落つこちて来た」と記している。「みんな早く庭に出るんだ！」と叫んだが、妻と四人の子供はすでに庭に飛び出してたと記しているが、友人二人については触れられていない。震動が鎮まつたと思うと、第二回のまた強い震動が起り、やや間を置いて第三回のがやって来たという。「壁は大分崩れ落ち、屋根の瓦ははずれ、庭先に幾片か落ちて来たし、水道は断水。」と記されている。何度も揺り返しが起るので、庭の垣根近くに莫塵を敷きそこで休んだ。吹田は震動の間を見て電車通りに出てみた。「大勢の者があちこちにかたまつて、何やらワイワイ騒いでいる、屋根瓦のすつかりずり落ちた家屋もある。原町坂下まで行つてみると、角の国民銀行はむざんにも倒壊している。電車が二台ばかり立往生。火事の黒煙が新宿あたりの空に立ちあがっている。」とその時の様子を記している。夜は庭に蚊帳を吊り、莫塵の上に蒲団や毛布を敷いて寝たが、深夜になつても時々余震があつた。そこで三晩を過したという。

三日目も四日目も夜警の若い男が家にやつて来て、「お宅では鮮人をかくまっているんじゃないか」とうるさく問われた。「二、三日前から泊っていた清家君の顔が、いくらか鮮人に似ているので、そんな風に疑われたのであろう。」と説明を加えている。五日頃からは余震もほとんどなくなつてきたので、知人や親戚を見舞つて歩いた。その途中で出くわした光景が記されている。

近くの交番所に×人が二人、三、四人の自警団の男に抑えつけられ、連れて来られる処を見た。その二人は交番の中に入れられたが、町の若者どもは手に棍棒をもっていて、それで交番の扉や窓を破ろうとする。窓の硝子が破れると、そこから棍棒を滅多矢鱈に突込むので、中からヒイヒイと声を立てて泣く声が聞えてくる。そういう暴行を制止しながら出てくる二人の巡査に抱えられて、ヨロヨロ出て来た二人の×人は息もたえだえの容子、みれば一人は鼻孔から血をタラタラと流し、もう一人は後頭部を割られていたようだ。その二人がどういふことをやったというのか、否、ただ彼等が×人であることのために、無考な群衆は無根な流言蜚語に動かされ、非常時特有な群衆心理から、かかる非人道な暴行を敢てするのではなからうか——群衆の後ろの方から見ていた私はこう考えて、思わず彼等に大喝を喰わそうかと思つた。

「×人」とはいふまでもないが、先に引用した部分では伏せ字にはしておらず、ここでことさらにそうした理由はよくわからない。「手記」にはそう書いてあつたからとも考えられるが、ではそもそもなぜ「手記」ではそうしていたのかという疑問は消えない。陰惨な場面だからということも考えられる。

四王天延孝(注42)は市谷本村町の陸軍省にいた。「その日は二十十日の厄日で、朝から変な空模様で雨も細かなのが変わった降り方をしていた。」と天候が記されている。陸軍省の航空課長であつた四王天はそろそろ食堂へ行こうと思ひ、屋外にある手洗いで用を済ませ課に戻ろうとしていた。「途たんに異常の響きと共に地は揺れて足を掬われるような感じがして立っていられないからソバにあつた檜の幹にツカまり、隣りの経理局の二階建の屋根を見ると段々振り幅が大きくなつて、全部崩壊するのではないかと思われたが、その内一旦納まりアトは余震が頻発するだけであつた。」と記されている。課長室に帰ってみると、怪我人はなく安堵したが、「戸棚は引くり返えり、書類が床にほうり出され」ていた。そのうちに、あちこちから火の手があがり、「陸軍省附近も火で包圍されるかと思われた」。電信電話もとまつた。「執務も不可能になつたので、寸暇を見て徒歩で中野

の自宅を見に帰つた。」と記しているが、陸軍省の課長が一時とはいへ職務を放棄したことはないかといふものかといふざるを得ない。それはともかく、幸い怪我人もなく家も少しの損害で済んだという。

二日になり戒厳令が布かれたが、「鮮人暴行」のデマは日増しにひどくなつたという。「甚だしいのは、陸軍省経理局の白土課長が下町に視察に行き必要な箇所をレンズに納めた所、激昂した民衆の中には、アレは怪むべき人物だ、口髯が薄くてドウも鮮人らしいと言つたので訊問した所、氏は秋田県の人で東京人には聞き取りにくかつたと思ひ、益々怪しい日本語も本当でない、トウトウ暴力を加へ人事不省になる程の重傷を負わされ、入院する程であつた。」と記し、「自分は窃に憂えた。」と述べている。自宅付近についても不安は同様であつた。「初旬の某夜中野の私宅に帰り附近が騒がしく、鮮人が井戸へ投毒するなど言い触らすものがある、念のため軍刀を携へ、自分等の住宅集団内を巡視し」た。その他、この件に関する記述は続くが割愛する。

岩崎昶(注43)は市谷砂土原町の自宅にいた。東京帝国大学の学生であつた岩崎は、九月の初旬には二学期もはじまるので、八月三十一の夜に北海道旅行から帰つて来た。「ちようどギリギリ大震災に間に合うように帰京したのである。」と自嘲的に述べている。翌九月一日は「朝からカンカン照りで、焼けつくような日であつた。」という。本を受け取りに日本橋の丸善に行くため、早く食事を済ませ十一時半には家を出る予定であつた。だが、祖母の食事の支度が遅くなり、食膳についたのは十二時近くになつた。「せかせかと食べ始めた途端」であつた。「いきなり地の底から手荒く衝き上げられたと思つと、私の坐っている畳、私の家の床、柱、天井、廊下、全体が、私の実感を正直に言えば五寸(一五センチ)ぐらゐの振幅で目にもとまらない速さで上下動を繰り返し始めた。」と記している。続けて、「畳の上に這いつくばつて両手で身体を支えるのがやつとだったが、大地の底の方からのゴーツツという鳴動、物の崩れ倒れる音、裂ける音、割れる音、そんなものがすべて一緒になつて、家全体が歪み軋み今にも潰れようとする。表を見ると、目の前を屋根瓦が重く黒い滝のように流れ落ち、壁や塀は見る見る縦横に裂け、土煙を上げてどうと倒れていった。」と記されている。一緒に膳を囲つ

ていた祖父と父親はとっさに座布団をかぶり、二人の姉と祖母はオロオロしているばかりだった。自身はというと、「不思議に恐怖感がな」かったといっている。「最初の激甚な大揺れが、ずいぶん長い時間に思われたが、だんだん緩慢な大波のようなうねりに代り、小刻みになり、一応おさまる」と、台所にあつた炭火の入った七輪を裏庭に持ち出した。むろん、火災を防ぐためである。余震は続いていたが、少し落ち着いたところで父親と一緒に家の内外を点検した。「屋根瓦の半分はイカれてしまっている。壁の損傷も相当で、方々の中途の泥が崩れ、下地の竹組が無残な姿で露出している。が、かんじんの構造そのものは持ちこたえた。」と記されている。

それが終わると、岩崎は外へ飛び出し、長い坂道を下り街並みに入った。「塀や石垣の多くは崩れ、倒潰した家も何軒もあり、そこからは血塗れになった負傷者が戸板に乗せて運び出され、坂を降り切つて外濠に沿つた道に出ると、外濠線という市電の線路のある広い道路の中央に太い亀裂が何メートルという長さに地面を割つて走っていた。」とその様子が記されている。それから外濠に架かる新見附橋を渡つた。そこで岩崎は与謝野晶子に会つたという。互いの無事を祝しあつたりと別れた。帝国大学の学生が与謝野晶子と知り合ひだつたというのも不思議に思うだろうが、晶子の長男が高等学校で一級下だつたという。要は、学友のお母さんだつたということであろう。それから土手づたいにしばらく歩いていると、様子が一変したという。「一劃全部がおそらく炊事中の失火からであろうが、猛火に包まれている。ゴーゴーと狂つたようなうめきを上げる炎をかくぐつて、血相を変えた無数の人びとが、箆^{たんす}、長持、家具、手提金庫などを運び出しているのだが、誰一人火を消しにかかつていないものがない。「道路に豪華なあるいは貧弱な家財道具の山が築き上げられる一方では、一軒が焼け落ちるを待たずにもう次の一軒に火焰が移つているという調子で、火勢は燃え広がるばかりである。」と記している。岩崎は真夏の暑さと炎の熱さに耐えきれず、また別の地区の様子を見ようと思ひそこを離れた。「さいわい、いたる所で水道管が破裂して、清冽な水しぶきを上げて噴き出し、咽喉をうるおすに不自由はなかつた。」という。飯田橋あたりまで来ると、先とはまた別の惨事を目にした。「ほとんど潰滅、

軒並み全潰状態といつてよかつた。瓦をすつかりふるい落して骨だけになった屋根の群れがベツタリと地面に伏せており、その間にたまに二階屋がちようど膝をガツクリ折つたように押しつぶされた一階の上に大きく傾いて乗っているのだった。なるほど、これが地震であつた。足の踏み場もなくなった狭い道路を全身血と泥にまみれた人びとが金切り声をあげて梁にしたから泣きながら手を振っている子供を救おうとしたり、死傷者の搬出に必死になつていた。」と記している。それから一旦家に帰つたのであろう。「日が傾きかけるころ、また家を後にし」たといっている。「若い学生で疲れを知らなかつた」と記しているが、その勢力には驚かされる。その夜に見た永久に忘れることのできない光景は、「炎上する東京の全景」であつたという。それは、「真紅、というよりもむしろ灼熱した黄金の焰がいたるところで猛烈に金粉を噴き上げながら、隙間もなく無涯限の大地を燃やして……と書くとか美しいものようだが、その想像を絶する凄惨さ」、「東京が滅亡して、灰になろうとしているのだ。絶え間なく烈風が吹き込んで、轟音がいつそう激しくなると、火勢を煽る。焰の舌は長く伸びて右に揺れ左に揺れる。」といつたように記されていた。その夜は、家から真座や蒲団を持ち出し、近くの竹藪で何家族かと一緒に夜を明かした。竹藪は地下茎が網のように張りめぐらされているので、地割れの心配がないのであつたと説明されている。

翌二日の午前中から様々な情報が入ってきた。「近所の米屋に群衆が押しよせて米や麦を掠奪しはじめた」といつたことから、警視庁、帝劇、三越、国技館といった大建築が燃えたといつたことまで。なかでもショックだつたのは丸善の崩壊であつた。昨日、予定通りに昼食を済ませて出て行つたら、ちようどその時刻に着いて下敷きになつていた可能性が大だつたからである。「私は祖母の昼食の遅れに感謝すべきだつた。」と感想を記している。ちなみに、この部分には倒壊した丸善の写真が掲載されている。キャプションには、「30分の違いが……。」とある。その他、浅草凌雲閣の高塔がポツキリと折れたことから、「足元にポツカリと深い地割れが口をあけてアツという間に馬方も車ごと吸いこまれて地底に姿を消した」といつたことも記されている。だが、なかでも「いちばん悪質で、結果が残

忍で悲惨だったのが、朝鮮人が各戸の井戸に毒を投入しているというデマだった。」と語っている。「川崎とか藤沢あたりで、朝鮮人の暴動が起ったという流言が私の耳に入った限りでは最初であった。ついで目黒火薬庫附近で、数百人の朝鮮人が武器を携え、日本陸軍と交戦中だと、まことしやかな噂が流された。いたるところの井戸に彼らが毒を投じて歩いているという説はその後で来た。」と記している。町々では自警団が組織された。「町内の顔役や鳶の若い衆たちが六尺棒、鳶口、急ごしらえの竹槍、なかには伝家の日本刀や仕込杖まで持ち出して、辻々の要所を固めて、通行人をあらため、風体にかちよつと不審な人がいると嚴重に取調べた。」と記されている。さらには、「亀戸事件」や大杉栄が殺害されたことにも触れている。

三日になって大学の様子を見に行つた。暑いのに制服を着て行つたという。「金ボタンの学生服なら自警団の怖い連中にくらかでも信用される」と考えたからである。だが、そのかいもなく、途中何遍も「ラリルレロを発音させられた」という。「ラ行の発音がうまくできなければそれが朝鮮人だ」ということになっていたので、先に見た大岡は、「バビブベボ」をいわせていたと語っていた。「途中で自警団に手を下されたらしい死体が菰をかぶせて道傍に放置されてあるのをすくなくとも三箇所で見つた。」とも記されていた。本郷通りまで来ると驚いた。「平常とほとんど変化を見せていない。どの家もがっしり立っている。たまにそれでも屋根瓦が二、三枚落ちたり、古い土壁に亀裂が入つていたり、そんなものである。」「地震? そんなものどこにあった? この街はまるでそう言っているようだった。」と記している。これならば大学も大丈夫だと思ひ進んでいくと、はたして赤門がそのまま立っていた。だが、さらに進むと図書館が炎上していた。「いや、炎上してしまつていた。」と正しくい直しているように、すでに燃えつくし余燼が残っているだけだったのである。「外から見た限り、建物自体の損害はそれほどではなかった。屋根のスレートもあまり落ちていないし、煉瓦壁の割れ目もそれほど大きくはない。が、かんじんの中身の蔵書はほとんど炎となって燃え去」つていた。「この時、私は不意に涙が頬を伝つて落ちるのに気がついた。」と記している。

岩崎は大学を後にし、上野公園に向かった。上野の山は人でごった返していた。「正面の広い石段を昇つてみると、そこから先は、真夏のジリジリ照りつける炎天下に、グワーンという騒音と土埃と密集した人間という動物の熱気とが、何ともいえずドス黒く濁つた霧となり、まるで固形物のように私を撥ねつけた。」と独特な表現でその人込みの様子を記している。「私は無理に立ち直つて、その霧をすかして目を凝らすと、たいていは一様に汚れくさつた浴衣一枚の群れが、家族同士でできるだけ小さく固まるように肩を寄せて、地面にムシロや毛布やシーツなんかを拵げ、やつとの思い出持ち出したらしい細々とした手廻りの品を後生大事に庇うように守つて、とにかく動物的生存の最低線ギリギリを維持する工夫をこらしているらしかった。」と記されているが、次のような人もいた。「中には避難までに余裕のある人も混じつていて、荷馬車や大八車に寝具などを載せ、きわめて稀にはそのころまだめつたになかつたフォードT型の自動車を持ちこむのに成功した金持ちらしい一家などもいて、そういう連中はその車を中心に生活をたくみに設計していた。」と。岩崎はやがて上野公園を後にする。

駅の残骸を左手に、車坂から浅草へ直通する広い電車道に入ろうとするとところで、私はもう胸がムカついていまにも嘔吐しそうな気がした。何ともいえない異臭、もつと正確にいえば、屍臭、腐臭が一面に立ち罩めていて、燃え落ちて焼け棒杭になつた電柱や太い電線やトランスなどが道路いっぱい散乱したり蛇のようにとぐるを巻いたりして、一歩ごとに苦労して障害を乗り越えなければ進めなかつたし、鉄のシャッシンだけになつた電車が所々に放置されたり、それはまだいいとしても、その間に人間の死体が、焼死体は炭化して真っ黒に小さくなって、あるいは窒息死であるうか、この方は普通の三倍ぐらいに膨脹してまるで怪獣のような裸の腹部を空に向けて、烈日の炎天にジリジリ照りつけられ、消防の刺し子やハッピーを着た人たちが区の吏員たちや在郷軍人がその取り片づけをはじめているが、季節が季節だけにすっかり腐敗してどうにも手に負えない。

それでも私は手拭で鼻と口をきつく縛つておいて頑強に前へ進んだ。ずいぶ

ん長い時間のように思えるが、そしてたぶん家族や親戚の安否をたずねに行くのだろう、私と前後するようにして、かなりの人たちが同じ方向へ歩いていくのだったが、そうこうしているうちに、突然私は眩暈めまいを起して、くらくらと路上に倒れかかり、べったりとうずくまってしまった。

地震発生の当日も精力的に街を歩き回っていた岩崎だが、三日もまた大学のあつた本郷をはじめ各所を歩き回っていた。「眩暈めまいを起して」道路に「うずくまってしまった」のも無理はない。岩崎は引き返さざるを得なかった。

大学が再開されたのは十月か、十一月であつたという。「倒潰の危険のある建物を工兵隊が残りに爆破し、その跡を整理して、バラックの教室を何十棟となくでつち上げた。」ものであつた。「カンナもかけていない板つペラを南京下見にしたトタン屋根の平屋。机も椅子も、長さ一間、幅一尺の四分板に脚をつけたもので、一脚に四、五人坐る。坐るとペコペコしなうようなシロモノであり」、「窓はガタピシして冬になるとビュービュー寒風が吹き込むという、いかにもお寒い設備」であつたと記している。

加太邦憲（注4）は北町の自宅にいた。「最初ニ微動ヲ感シ尋テ上下動ヲ感シタレハ予ハ思ハス庭前ニ駈出シ樹木ニ依リテ後強キ横震ヲ感シタレハ此処ヨリ予カ家屋ニ階ノ激震ト之ニ依テ屋瓦ノ揺リ落サルルヲ眺メ居タリシナリ」と記されている。家屋の被害状況については詳細に記されている。「家ノ北部屋瓦二百余ヲ揺落シ屋蓋全体ノ瓦ヲ上下動ニ依テ転動シニ階北部ニ於テハ上下動ノ為メ数十ノ瓦力屋上一所ニ堆積セラレタル箇所モアリタリ壁ハ全体ニ多少ノ亀裂ヲ生セシモ剥落ヲ見シハ二三箇所ニシテ夫レモ堅幅共五寸位ニ過キサリ石垣ハ西隣ニ面シタル方高サ一間長サ三間崩壊シタリ要スルニ当邸ノ被害ハ先ツ最モ少キ方ト申スヘク金額ニ積リテ一千五百円以内ナラン」と被害金額までが予想されている。午後三時頃に東の方を眺めた様子が記されている。夕方から夜になつての様子も含めて記しておく。

一里余ヲ距ル所ニ二十五度乃至三十度ノ高サニ当リテ凄然タル怪雲ヲ目撃セ

リ其少時前火災中ニ雷鳴アリタレハ予ハ始メ普通ノ雷雲（俗ニ云フ入道雲）カト思ヒシニ普通ノ雷雲ヨリ濃厚且ツ鮮明ナル鱗型ノ白雲ニシテ雷鳴時ノモノト異ナリテ前面ニ綿雲ト称スルモノモ頭ハレ居ラサレハ異様ノモノナリト怪シミタルニ後ニ聞ク所ニ依レハ是ハ雷雲ノ一種ナルモ雷鳴時ノ雷雲ニ非スシテ被服廠跡辺猛火ノ為メ水蒸氣ノ発作ニ因リタル雷雲ナリト而シテ其下部ハ火災ノ黒烟カ北風ノ為メ其前面ヲ南ニ流レシカ上部ハ無風ナリト見エ怪雲ハ夕方ニ至ルモ尚ホ不動ノ儘其形態ヲ変セス夜ニ入りテハ之ニ火焰カ映シテ赤色ニ化シ遂ニ何時トナク消散セシカ予ハ生来始メテ斯ル奇雲ヲ目撃シタリ

次に、「今回ノ震火災ニ際シ一ノ予期セサル事件勃発セリ」として記しているのは、いわゆる「朝鮮人」騒動と社会主義者の「騒擾」についてであつた。「夫ハ兼々政事上不平ノ鮮人東京其他内地ニ入込ミ居リテ好機ヲ捉ヘ事ヲ挙ントスル者等時至レリト暴挙ヲ起シ又社会主義者モ急ニ立チテ騒擾セントシタ」ことである。続けて、「当時新立ノ内閣モ驚キテ鎮圧ヲ策セシカ此不意ニ起チタル少数不秩序ノ鮮人更ニ恐ルルニ足ラサルモ人民ハ此事ノ伝ハルヤ其程度ヲ知ラサルヨリ大ニ不安ヲ感セシノミナラス又主義者ハ乍チ此時ニ乗シテ「鮮人数百人隊ヲ為シ襲来シタレハ掠奪放火殺人等ヲ擅ニスヘシ」と大袈裟ニ言ヒ触ラシ一般ノ大恐慌ヲ起サシメタリ」と記している。社会主義者が「朝鮮人」騒動を吹聴し煽り立てたように述べているが、少々特殊な見方といえるであろう。

ところで、加太の自伝が上梓されたのは一九三一年、震災からは八年しかたつていない。加太はかつて裁判官を務め貴族院議員に選ばれたこともある人物であるが、自身の経験した震災の記述というよりは、震災の概観的な記述という側面が強い。焼失した官公庁や大建築を列挙したり、「東京大震災火災損害及其他関係表」として、その被害状況を数字で詳細に記してもいた。また、その後の復興状況等についても少なくない言を費やしている。

水谷八重子（注5）は神楽坂の自宅にいた。すでに女優として活躍していた水谷は、盲腸を悪化させ自宅で療養中であつた。「裏庭に近い墓地の蟬の声をきくともなくききいつていますと、だしぬけに、ガラガラと屋鳴りがおこりました。

思わずおフトンを頭からかぶりましたが、屋鳴りはやまず、その上にこんどは上下にゆれて、まるで船の難破を思わせるように激しくなってきました。」と記されている。母親と姉の名を呼びながら台所から裏庭に飛び出した。寝間着姿のまま墓地のそばで縮こまっていたところに、母親と姉がおびえながらやって来た。「ここで過ごした数刻は、本当にこの世の最後の阿修羅場かと思われました。」と記している。幸い家は無事であった。夜になり、怖がる自分を義兄が牛込会館の屋上に連れて行ったといっているが、療養中の義妹をなぜ連れて行ったのか不審である。義兄は見渡す限り火の手が上がっている街を指し、「日本はどうなるんだろう」と涙ぐんだ。そして、「八重子、しっかりと戻らなよ。なあに、この会館が残っている限り芝居はやれるさ」と繰り返して戻らなよ。その義兄の奔走もあり、十月十七日から一週間、牛込会館で公演が催された。義兄の言葉が程を經ずして実現したことになる。震災後はじめての芝居だったので大盛況であったという。

金子光晴（注46）は赤城元町の自宅にいた。ただし、二階の八畳を人に貸し、自身は玄關脇の三畳の女中部屋に住んでいた。その部屋は「自動車部屋」と名がついていたという。どうしてなのか説明はないが、自動車の車内のように狭かったからであろうか。金子は詩作を続けていた。「正午頃、僕がまだ三畳の自動車部屋に寝ている時に揺れ出した。」と記し、続けて「揺れ出して、そのうち終ると思っていた地震が、ますますはげしくなり、はては、台所の引窓から屋根瓦が落ちてきた。」と記されている。危険を感じた金子は、座布団を頭にかぶり通りに出た。それから、義母がいる新小川町の方に向かった。「神社の前を通ると、鳥居がいまにも倒れそうにゆらゆらしていた。大地は飴のようにうねりつつける。僕が通りすぎるとすぐ、うしろで、がらがらと石塀が崩れる。」とその途中の様子が記されている。新小川町に辿りついたが、「余震は益々はげしく揺りかえし、下町の方角にあたって、火の柱が立った。大火で龍巻が起っているであった。」と記している。さらには、「地震はくり返され、つぶれた家から圧死体がはこび出された。夜は、狐火のようにいろさまさまな焰が燃えて、うつくしいほどだった。」と記されている。余震は十日過ぎても続いたという。

「朝鮮人さわぎ」についても言及しているが、やや詳しく記されているのは「左翼書生」に対する警戒ぶりであった。「髪の毛をながくしていたために社会主義者ときめられて、有無を言わず殴打されたうえに、警察に突出されるのを、僕は目撃した。」と記し、また、「アナーキストだった壺井繁治などが逃げあつたり、弘前なまりのために、鮮人とまちがえられた富士幸二郎が、どいつを唄って、やっと危急をのがれたりというようなこと」もあつたと記している。壺井も富士も同じ詩人仲間であった。そして、疑惑の眼は自分にも向けられた。暴力団のような男から河原に呼び出され、金子は「日本刀を腰にさして出かけていった」。相手は棍棒を持ち、三人で待っていた。「この社会主義者奴、くたばれ」といって、棒を振り回してきた。金子は親指と耳の後ろに傷を受けたという。相手は「このへんにまごまごしていない方がいい、二度と顔をみたらただではおかない」と凄んで去って行つたというが、このあたりの記述は腑に落ちないところが目立つ。呼びつけておきながら、「このへんにまごまごしていない方がいい」というのも変だが、金子がなぜ日本刀を持っていたのかも不審である。暴力団風の男とはいえ、日本刀を持つていながら棍棒で怪我をさせられたのも、不思議といえはいるであろう。日本刀を持つていている人間にそもそも棍棒で襲いかかるであろうかという疑問も残る。

石垣綾子（注47）は早稲田南町の自宅にいた。設立されたばかりの自由学園の学生であった石垣は、その日の天候をやや叙情的に記している。

この朝、まっさおに晴れていた空の中から、厚い夏雲が、むくむくと折り重なって、頭をもたげる蛇のよう。強い陽光をうけて、その怪物はさまざまの陰影のしわを描きながら、はげしい勢いで黒さをました。たちまち、辺りは夕闇の暗さになって、しのつく雨が大地をひき裂くように落ちてきた。地域的な雨で、あまり降らなかつたところもあつた。

私は縁がわに吸いついたように立っていた。自然のただならぬ変貌が、私の心を掻きむしり、痛いような快感があつた。突然おそつた大雨は、数分のうちに突然に止んで、また陽光のさす夏の日となった。

妹たち二人と昼食の卓につき、箸を取り上げようとした時であった。「地の底からもりあがる震動が、いきなり私のからだをはねとばした。室のかべがひきちぎれて、白いほこりが舞いあがった。よほどひどい地震だなと思ったが、呆然とした私は立ちあがろうともせず、柱時計の傾斜をながめた。時計の針は午前十一時五十八分で停止していた。電燈のはげしいゆれを目で追った。」と記している。「用心棒の男手」として住み込んでいた出入りの植木屋が駆けつけて来て、「危い、庭へお逃げなさい！」と叫んだ。それを聞いてはじめて事の重大さに気がつき、妹たちとともに庭に飛び降りて駆け出したという。「途中で後をふりかえると、地上にどつしり重く建っていた家は、次におそった余震をうけて、ぐっと斜めにかたむき、倒れるかと思われた。私たちは庭の隅にかたまつて、声もなく、横にかしぐ家のみつめた。それは地上に横たおしになるかと思われる瞬間、意識をもどしたように、ぐっと胸をそりかえして、真つすぐに地上に立ちすくんだ。」と記されている。さらには、「隣家の二階の屋根がわらが崩れ落ちて、大きな地ひびきがした。私が小さいときに姉と遊んだひょうたん池は、大波をたてて水は芝生の上にはねかえり、波で押しあげられた金魚が、ヒラヒラと芝生の間にはねかえっていた。」と記されていた。

近所に住む姉がやって来て、出かけていた弟も帰って来た。余震の合間をぬって家の中に入り食料を持ち出した。水道は止まっていたので隣の井戸から水運び、急ごしらえのかまどを庭の一隅に作ったという。しばらくして、叔母が五人の子供を連れて避難して来た。夜は布団を持ち出して横になった。「空をあおぐと、血を流したような真赤な空、夜がふけるにつれて、ますます赤くただれていった。」と記されている。だが、余震が鎮まった頃から別の恐怖に襲われたという。夜警団に加わっていた弟が現れて、「朝鮮人が五百名、今、隊をくんで、大塚の火薬庫を襲撃中、この方面にやってくるそうです。警戒せよという指令が出ました」と知らせてきた。叔母もまた、「夕方、お隣りへ水をもらいにいったら、井戸の中に朝鮮人が毒をいれて歩いているから、気をつけて下さいって巡查がいうんだよ、本当におそろしい」と話したというのである。さらに、例の植木屋もやって来て、「朝鮮人が、今、この辺に逃げこんだらしいというので、偵察にきたのです。

だが、別条はありません、御安心下さい」といったという。

何日のことかは記されていないが、山川均夫妻が行方不明であるという話しを友人から聞いた。それから十日ほどしてから、山川夫妻は無事だが、大杉栄が虐殺されたという噂が広まった。「一カ月前に、お寺の座敷で身ぢかに見た大杉の大きな瞳を思い浮かべた。顔を知っていたということから、この噂は大きなショックであった。だから一生懸命に否定しようとした。あの大杉が殺されるということがあり得ようか。」と記されている。そうした疑問を抱きながら、石垣は毎日歩いたという。また、学校による震災の救済事業として動員され、東大附属病院に収容されていた罹災者を慰問したこともあった。「病室は足らず、ほこりっぽい大広間を仮りの病室にあててあった。そこにベッドはなく板の間にならべたふとんの上に、ミイラのように繻帯をまきつけた患者たちは、魂を失ったようにずらりと寝かされていた。病人のうなり声やすり泣きが、オーオーと声にならない声をあげた。陰惨で強烈な光景であった。」と、病院の状況を記している。罹災者の中に、偶然にも女学校の友達がいた。彼女は、本所被服廠跡に逃げ込んで助かった数少ない一人であった。「彼女の家族は全滅して、ひとり生き残った。私はどんな言葉も薄っぺらで、そらぞらしくて、なぐさめることもできなかった。」と記している。それが九月二十四日のことだったのである。「その翌朝の九月二十五日であった」と記している。「『東京朝日新聞』によって大杉栄が殺されたことを知った。そこではじめて妻の伊藤野枝と甥の橘宗一も殺されたことを知ったという。「この虐殺は、社会的な大事件であったが、私にとつては、それよりも、もつと身ぢかなつながらりのショックであった。皮膚に触れる直接的な震動であった。」と石垣は述べている。

岡村保雄(注48)は早稲田鶴巻町の自宅にいた。岡村は印刷業を営んでいた。「午前十一時五十八分我が家食事中、突如起つた大激震、屋根の瓦は滝の如く落ちて来る。初震の静まった時屋外に出て、南東を見ると黒煙が神田、日本橋の方面に、高い土堤を築いたように真黒く見えた。近所では火の手の揚つた様子は無いが、阿鼻叫喚が耳を圧する如く余震の音と共に私共の心胆を脅かした。」と記されている。夕方になり、東南に見えていた煙は「紅蓮の炎となって火は手近く迫って

来たように見え」た。「朝鮮人の暴徒が民衆に放火するとか、飲料水に毒薬を投じたというデマゴギー」も伝わってきた。二日になっても火災は一向に治まらず、「風に送られて白い灰が煙り、臭い匂いで疲れた私共の神経を襲う。」と記している。深川にいた親戚の子供や、亀沢に住んでいた知人夫婦が避難して来た。知人夫婦がそこに辿り着くまでの話が記されている。

幸い家に居た。忽ち家は半壊になった、中から這い出したが、もうあたりの家々から黒煙が立ち昇って居た。女房が昼食の仕度をし終わったので瓦斯は消してあった。ポケットマネー少々持った丈で女房を伴い煙に苦しめられながら津波の恐れのない山の手と思つて、まず両国橋を目差して二人で走った。手に何も持つて居ないのだから走れる訳だが、大きな荷物を背負った群衆に進路を妨げられて一向に進む事が出来ない。其の上火勢はだんだん強くなり、避難者の荷物にも火が着く、そんな中を漸く両国橋を渡り、柳橋の袂で熱さに堪えられなくなった。神田川に飛び込んで二人で橋脚に掴まり、飲まず食わず一昼夜、顔や頭の熱さを凌ぐ為に、神田川の汚い水に頭を潜らせて顔や頭の焦るのを防いだ

知人夫婦は「三十三時間振りと言ふ食事を旨そうに食べて居た。」と加えられている。「流言飛語」は一向に治まらない。「江東方面は大津波だ、震災で生き残った人達も津波で全滅した」、「トンネルが崩れた為に米が入って来ないとか、神田佐久間町（免災米屋町）に米が、うんとあるから押し掛けて行つて皆んなに安く配給させるのだ」、「朝鮮人の殺された者は数万人だ」といったものであった。一方、アメリカからいち早く救援物資も届いたといっている。「今のような大きな飛行機は存在して居なかった時に、よくも速かに京浜地区三百万の人達に、食料や衣類を潤して呉れた事に、市民は皆感謝すると共に、強大な物資の力に驚異と脅威を覚えた。」と記している。

三日朝。「早稲田大学のあたりから西に入道雲が雷鳴を轟かせながら拡大されて居た。驟雨が落ちて来そうな雲行きで大雨にでもなったらどうしようとかと考

えて居た。」と記されている。雨を心配したのは、はじめの地震の時に屋根瓦が全部落ちていたからである。九時頃、父親が二台のリヤカーに亜鉛板を積んで、ブリキ屋とともにやって来た。「屋根の葺き終るのを待つて居たように、雨が降り出したが、左程大雨では無く程なく止んだ。」と記している。翌日に父親は帰った。帰った後、罹災した得意先を見舞うために自転車で出かけた。十年間勤めていた神田の紙屋へ行って見たが、焼け跡になっていた。「名物の神田川の鰻屋も未だ燃え切らず煙を出して居た。ニコライ堂の大伽藍も廢墟となって見る影も無い。」と記し、「駿河台から廢墟の東京を見ればまた方々で煙が立ち上がつて居るのはこの廢墟の都を弔う線香のように思えた。」と感想を述べている。途中、自転車がパンクしたので帰りは押して歩いたという。そのためであろうか、見舞い先に関するその他の記述はない。家の近くで自転車屋にパンクを直してもらったが、五十銭も取られたという。普段の十倍の値段だったことに憤慨している。五日。自転車では無理だと思ひ、今度は地下足袋を履いて得意先の見舞いに出かけた。神田神保町、神田錦町、神田多町と回り、さらには深川、本所へと回った。神田を中心としているのは、印刷業を営んでいたためであろう。いうまでもなく、神田には出版社が多く存在した。「本所にも深川にも未だ彼方此方に焼死体が死臭を漂わせて居た。また河には水脹れになった遺体が波の間に動いて居るのにも目に止った。」と記されている。六日、八王子の米屋から米一俵が届いた。母親からの慰問の贈り物だったというが、八王子からよく運んできたものである。また地下足袋を履いて出かけようとした時であった。ある青年がやって来て、「君もよく知つて居る南喜一君の弟平沢計七君と、その友人河合義虎君等が亀戸署で軍隊の為に虐殺されたよ、僕も今リポートを受けたばかりだよ」といった。平沢計七には面識がなく、その青年も記憶にはなかったといっているが、なぜか不思議な出来事とは捉えられていない。

山本敏雄（注49）は高田馬場の自宅にいた。自宅といつても一間の間借りで、妻以外に同居人もいた。しかもその部屋も自身で借りていたものではなかった。二人とも浴衣で、寝ころんでいた。二百十日の前日、雲の多い日だったが、蒸し暑い南側の窓をあげ放して、まだ、朝食もとらず、無駄話をしていた。」と

記されている。お昼近くになっても朝食を取らなかったことを、「土曜で半日だったせいもある」と説明しているが、よくわからない。もう一つの理由としているのは、「妻がおさんどんを好まなかったからである」といつている。妻とは、プロレタリア作家の平林たい子で、山本もプロレタリア運動をしていた。「異様な轟音とともにぐらぐらと上下動の激震である。逃げるまもない。二階の戸袋は吹き飛び、壁には大穴があき、砂塵が舞い上る。窓の前方は、松平伯爵邸の土手で、さっぱり視界はきかない。」「階下に下りようとするが、梯子段が外れかかっている。夢中で、玄関口に出ると、こんどは硝子戸が曲って開かない。ようやく、戸を蹴破って路地に出たが、屋根からはばらばら瓦が降るように落ちて来る。」と記している。「おもてに出るまでの時間は、二分位のものだったろう」とも記されていた。大通りに飛び出し松平邸のある台地まで行くと、「火の手の上る東京中の空が黒い煙で覆われてゆくのが、望見された。」といつている。夕闇が迫ってきた頃、山本は妻と二人で下町の大火災を見に行った。「早稲田市電終点から徒歩で九段上に辿りついたときは、下町一帯火の海だった。無数の避難民が押し寄せ、坂上一帯は阿鼻叫喚の生地獄であった。」と記されている。その夜は土手の芝生の上に寝たと言いつ。

翌日は下谷、浅草の火を見るために上野の山に向かった。「人は逃れてゆくのに、私たちは火に向って進んでいった」のである。上野の山は大混乱を呈していた。「避難の途中ではぐれたり、行方不明の家族をさがす人々が、紙や白布に名前をかいた幟をもって、名を呼んで歩いている。だが、きのうから今日にかけて燃えつづける川向うの大火災では、被服廠跡に逃げこんだ数万人の人々は焼死した筈である。死んだとはわかっていても、捜さずにはいられない生存者の悲痛な叫喚だった。」と記している。上野からの帰りには食料品屋の前で缶詰を拾い、湯島天神の境内で苦心して開けて食べた。日の暮れぬ前には家に帰り着いたといつ。

三日にはまたまた出かけた。下谷、神田、日本橋はすっかり灰になっていた。「栄華の大伽藍三越も焼けて空洞と化していた。警視庁が焼けたのは、きのうだった。銀座、新橋まで焼野原だったが、日本橋の上までできて、もう足が進まなかった。橋下の黒いよどんだ水の上には焼屍体が浮んでいた。帰路の駿河台下交叉点

の脇には、焼けてまっ黒なミイラの死体が横たわっていた。水道橋の畔でみた火ぶくれの屍体に近づいてみると、それはちょうど鯖の塩焼のように皮がむくれていた。」と、その悲惨な状況が独特な表現で記されている。道端で焼け残りのバナナを高値で売っていた男がいたが、金がないので買うことができなかつたといつ。なお一つ付け加えておけば、山本は震災について一種ポジティブな発言をしていたことである。「これで、みんな同じになれるんだ」といつ山本に、妻も「そうだワ」と答える会話が描かれ、「私たちは前後もなく、この大天災に昂奮していた。」と記していた。さらには、「失うべき財産も、地位もない私たちには、むしろ、不安とともに解放感があつたといつても嘘ではあるまい。」とも記していた。

田中美知太郎（注50）は友人宅にいた。「新宿に近い友人の家」と記されているだけなので、新宿区とは断定はできないが、一応ここで取り上げておきたい。地震発生時、京都帝国大学の学生であつた田中は夏休みで帰省していた。頼まれていた翻訳の仕事が八月三十一日に完成し、旅行にでも出かけようと思つていたといつ。「二階で話をしてゐると、急に地震がやつて来たのである。本箱が倒れ障子がはぐれ、近所の家の屋根瓦が滝のやうに落下して行くのが見られた。友人二人はテーブルの下へ頭をつつこんでゐたが、わたしは逃げ場もないので、椅子に腰かけたままだった。」と記している。地震が小やみになつてから、階段を下りて庭へ出た。やがて自宅のことが気になり、市谷柳町にある家に帰つた。歩いて帰つたといつているので、友人の家はやはり新宿区にあつた蓋然性が高いであろう。家は瓦も落ちておらず、家族もみな無事であつた。「朝鮮人騒ぎ」がはじまり、自警団が組織されることになつた。各戸から男一人を出せといわれ、家族の中男一人であつた田中は出ざるを得なかつた。自警団について田中は、少々面白い見方をしていづ。

災害や破壊の危険が目前にあれば、被害を受けるかも知れない恐れを感じた人間が、自己防衛に立ち上るのは自然のことである。普段はこれは警察や軍隊の国家権力に一任されてゐるが、その秩序が破られて警察や軍隊の保護が間に合はなくなれば、自分たちで自分たちの安全を守るほかはなくなる。震災はわ

たしたちの近代生活の秩序を破壊して、わたしたちを原始生活に引きもどしたやうなところがあつた。だから、わたしの町の自警団の人たちもなんとなく生々としていて、楽しさうでさへあつた。会社づとめをやめて、日本刀などを腰にはさみ、どこそこに怪しい物音がしたとか、不審の人影が見られたとかいふことで、そこらを探しまはつてゐるとき、人びとは子供のときの兵隊ごつこの楽しみを再現してゐるやうにも見られたのである。

必ずしも敵の存在が信じられなくても、人びとはちやうど半醒の状態にあるのと同じで、むしろ消えて行かうとする夢を追はうとするかのやうに、敵の存在を信じたいやうな気持になつてゐたのではないか。それは楽しい遊戯を成立させる必要条件だつたからである。

もちろん、田中は自警団のネガティブな面を無視している訳ではない。合わせて、「眼前の現実を説明する簡単な情報が求められてゐて、いろいろ想像されたりはれたりしてゐるものうちから、人びとは原始人のやうに悪魔の跳梁を信じたのだと言ふことができるだらう。」といい、「人間は異常の状況において、容易に魔女狩りの心理になるものなのである。わたしたちは根底において原始野蛮の人間なのである。」と述べていた。

注

- (1) 薄田研二『暗転 わが演劇自伝』(東峰書院 一九六〇)
- (2) 柳永二郎『木戸哀楽 新派九十年の歩み』(読売新聞社 一九七七)
- (3) 藤本とし『地面の底がぬけたんです ある女性の知恵の七三年史』(思想の科学社 一九七四)
- (4) 鈴木文治『労働運動二十年』(一元社 一九三二)
- (5) 小林恒子『きのふの空 第一部・第二部・第三部』(東京布井出版 一九九六、二〇〇一、〇三二)

- (6) 中村白葉『ここまで生きてきて 私の八十年』(河出書房新社 一九七二)
- (7) 高群逸枝『火の国の女の日記』(理論社 一九六五)
- (8) 斉藤長次郎『がむしゃら人生』(佛乃世界社 一九七三)
- (9) きだみのる『人生逃亡者の記録』(中央公論社 一九七二)
- (10) 菅原道明『古稀来』(青果園 一九二六)
- (11) 国井紫香『駄々っ子人生』(妙義出版 一九五六)
- (12) 中村汀女『汀女自画像』(主婦の友社 一九七四)
- (13) 熊谷守一『へたも絵のうち』(日本経済新聞社 一九七二)
- (14) 岩野喜久代『大正・三輪浄閑寺』(青蛙房 一九七八)
- (15) 神近市子『神近市子自伝 わが愛わが闘い』(講談社 一九七二)
- (16) 牧野富太郎『牧野富太郎自叙伝』(長嶋書房 一九五六)
- (17) 藤田佳世『大正・渋谷道玄坂』(青蛙房 一九七八)
- (18) 大岡昇平『少年 ある自伝の試み』(筑摩書房 一九七五)
- (19) 佐々木孝丸『風雪新劇志 わが半生の記』(現代社 一九五九)
- (20) 青野季吉『文学五十年』(筑摩書房 一九五七)
- (21) 入江たか子『映画女優』(学風書院 一九五七)
- (22) 真船豊『孤独の徒歩』(新制社 一九五八)
- (23) 渡辺順三『短歌的自叙伝 烈風の中を』(東邦出版社 一九七二)
- (24) 三宅正一『幾山河を越えて からだで書いた社会運動史』(恒文社 一九六六)
- (25) 宮川岸雄『東京っ子半生記 上巻・中巻・下巻』(通信評論社 一九八九、九〇、九三)
- (26) 桑沢きぬ『ひとすじの路』(佛乃世界社 一九七四)
- (27) 勝目テル『未来にかけた日日』(前編) 明治・大正・昭和を生きて』(平和ふじん新聞社 一九六一)
- (28) 住井すゑ『わが生涯 生きて愛して闘って』(岩波書店 一九九五)
- (29) 三遊亭円生『寄席育ち』(青蛙房 一九六五)
- (30) 藤原道子『ひとすじの道に生きる』(集団形星 一九七二)
- (31) 山田国太郎『明治少年の歩み 山田国太郎の一生』(同書を出版する会

一九七九)

- (32) 内村祐之『鑑三・野球・精神医学』（日本経済新聞社 一九七三）
- (33) 永井叔『大空詩人 自叙伝・青年編』（同成社 一九七〇）
- (34) 米川正夫『鈍・根・才 米川正夫自伝』（河出書房新社 一九六二）
- (35) 西條八十『唄の自叙伝』（生活百科刊行会 一九五六）
- (36) 香川綾『一皿に生命こめて 栄養学に賭けた私の半生』（講談社 一九七七）
同 『栄養学と私の半生記』（女子栄養大学出版部 一九八五）
- (37) 松田竹千代『無宿の足跡 わが青春の記』（講談社 一九六八）
- (38) 徳田球一『獄中十八年』（時事通信社 一九四七）
- (39) 野坂参三『風雪の歩み 第一巻く第八巻』（新日本出版社 一九七一〜八九）
- (40) 入江相政『日日是好日』（読売新聞社 一九七八）
- (41) 吹田順助『旅人の夜の歌 自伝』（講談社 一九五九）
- (42) 四王天延孝『四王天延孝回顧録』（みすず書房 一九六四）
- (43) 岩崎昶『映画が若かったとき 明治・大正・昭和 三代の記憶』（平凡社 一九八〇）
- (44) 加太邦憲『加太邦憲自歴譜』（私家版 一九三二）
- (45) 水谷八重子『芸ゆめいのち』（白水社 一九五六）
同 『女優一代』（読売新聞社 一九六六）
- (46) 金子光晴『詩人 金子光晴自伝』（平凡社 一九七三）
- (47) 石垣綾子『私の爪あと』（東都書房 一九六〇）
- (48) 岡村保雄『東京貧乏物語』（ふだん記全国グループ 一九七六）
- (49) 山本敏雄『生きてきた』（南北社 一九六四）
- (50) 田中美知太郎『時代と私』（文藝春秋 一九七二）

付記 本研究は、日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽研究 課題番号

一三三六五二〇四八）の助成を受けた。